

361
83



始



農學士今村猛雄著

趣味
實利
三坪花園

東京堂書店發賣

361-83

農學士今村猛雄著

趣味
實利

三

坪花園

大正

6. 6 25

内交

東京堂書店發賣

御 挨 拶

一、此この小さな本ほんには草花くさばなの作り方つくりかただけを書き集あつめました、春生はるはえて秋あきまでに枯かれる一年草ねんさう、又はヤット一冬ふゆだけ越こして枯かれる二年草ねんさうといふのが三十六種しゆ、宿根しゆくこんといつて地上ちじやうの莖くきは其年そのとしに枯かれても根ねだけは、生き残のこつて年々ねんねん芽めを出すもの二十三種しゆ、球根きうこんと名なづけるもの、實じつは塊根くわいこんもあれど多くは鱗莖りんけいや根莖こんけいなどで根ねではなくして、植物學上しよくぶつがくじやうの地中ちちゆうの莖くきを有いうするもの十九種しゆを選びました。

二、讀よみよいためとおもつて、一二年草ねんさう、宿根草しゆくこんさう、球根類きうこんるいと大別たいべつし、そして五十音順おんじゆんに列ならべました、これが讀よむときにさがし

よからうとおもつたからです。

三、土壤の事だの肥料の合せ方だの、ヤレ床地がどうか、温室はどうつくとかいふ様な、一般的の説明は畧しました、そして手取早くわかる様必要の事ばかりに縮めました、本式に専門的研究をなさる方には向きますまいが、良き花さへ出来れば澤山との御意見で、三坪の花園を有たる、方は勿論、十坪でも百坪でも乃至は一反歩一町歩でも實地に成功を求めらる、方々に読んで見て戴き度い即ち何事も簡單を主とする大正式草花栽培書です。

趣味 實利 三坪花園 目次

一、はしがき……………一

二、花園……………二

三、花壇……………五

四、一二年草類……………九

 あさがほ……………九

 あらせいとう……………三六

 きんけいきく……………三七

 きんせんくわ……………三八

 きんれんくわ(のうぜんばれん)……………三九

くじやくちゆう(くじやくちゆう).....四〇

くわくかうあきみ.....四一

けいとう、はげいとう.....四二

けし、ひなげし.....四四

コスモス.....四六

サルキヤ.....四七

さんしきすみれ(いうてふくむ).....四八

じやかうれんりさう(スキートビー).....四九

シネラリア.....五三

スカピオザ.....五五

せんいちさう.....五六

つくばねあさがほ.....五六

トレニア.....五八

ネメジヤ.....五九

ネモフィラ.....六〇

はうせんくわ.....六一

はなびしさう.....六二

ひそんさう(ちんりさう).....六三

ひまはり.....六四

ひやくにちさう.....六五

まつほぼたん.....六六

まんじゆぎん.....六七

むきなてしん.....六八

むぎわらぎん(かぶきさへ).....六九

四

むしとりなてしん(ムシとりなてしん).....七〇

やぶるあまぎへ.....七一

やぶるまてんじんぎへ.....七三

ゆふがほ(やぶるあまぎへ).....七三

るかうやう.....七五

ロベリア.....七六

わすれなごき.....七七

五、宿根草類.....七九

アルメリア.....七九

カーネーション(じやかうなてしん).....八〇

きく.....八四

キユーフエア.....九九

まんぎよやう.....一〇〇

くさけふちくたう(フロツクス).....一〇一

けまんさう(あぢぼたん).....一〇三

さくらさう.....一〇三

しやくやく.....一〇八

せらやうさくさう(プリムラ).....一一一

ゼラニウム(てんぢくあひ).....一一六

すざらん.....一二九

パイオレット(にはひすみれ).....一三二

びじよさくら(はながわ).....一三三

ひなまき(せんめりまへ).....一三三

フクシヤ.....一三四

五

六、球根類

ふくじゆなうり……………一三五

ヘリオトロープ……………一三八

まつばぎく……………一三九

ミムラス……………一三〇

マーガレット(バリデージー)……………一三一

ランタナ(七變化)……………一三二

ルビナス(はうちはまめ)……………一三三

球根類……………一三四

アネモネ(おきなぐさ)……………一三四

アマリリス……………一三九

オキザリス……………一四一

カンナ……………一四三

グラヂオオラス……………一四四

グロキシニア……………一四七

さふらん(クローカス)……………一四九

シクラメン……………一五一

すのせん類……………一五四

すのれん……………一六一

ダーリア(てんじくほたん)……………一六六

チユーリツブ(鬱金香)……………一八〇

はなしやうぶ類……………一八五

ヒヤシンス……………一八九

フリージア……………一九六

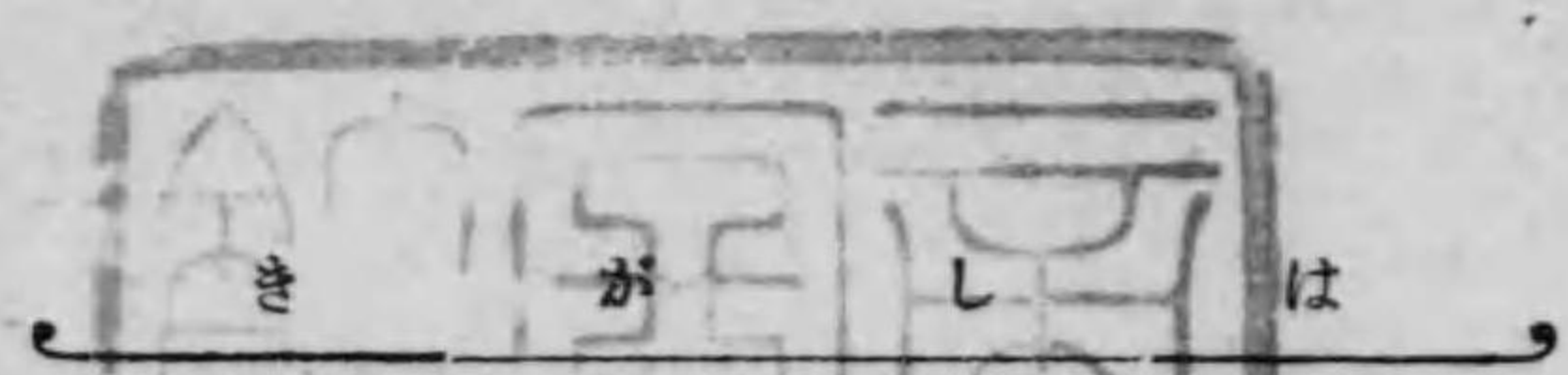
ペコニア……………一九八

ムスカリ……………二〇一

ゆり……………二〇三

ランキンユルス……………二〇八

目次終



趣味 三坪花園

農學士 今村 猛雄 著

一、はしがき

正直に白状する、私が草花を作つて居る畑の面積は、僅に一百と二十三坪で三坪よりは廣きこと實に百廿坪、然しこんな狭い猫の額見た様な畑でも、獅子の狂咲きも出れば、牡丹の花も笑ひ出す、四季折々の草花に可なりの面白味はある。植ゑ付けの時や、基肥をやる時など、自分一人ではやりきれぬから、一ヶ月に兩三度は銀さんといふ年來頼みつけにして居る染井の植木屋を頼む、銀さんはよく私の心を知つて居て私が留守でも忠實に間違ひなくやつて呉れるから、まづく見られる花が咲

き出す。電車の終點に近い市外の集鴨の田舎であるが、これが愉快で此處に永住を續けて居る、唯一番困るのは、雑草の生へる事で、つくしの親やよめなの子が、やゝもすると我物顔に畑を占領する。然しお蔭で身體は壯健になる、色は黒くなる、畑の中で海水浴をやつたと思へば良い、これがほんとうの畑の水練といふのだらう。畑の廣い狭いは苦にならぬ、結果はそれ相應に見られる、庭植多ならば又それ丈の樂しみはある、大都會に接して棲まるゝ者は専門の事業としても收益多く、副業に營んでも必ず其趣味に伴うて實利は得らるゝ、花を眺めて樂み、花を賣つて利益を得る、花屋程幸福な商賣はないだらうとおもふ。私は敢て之を商賣になさいとばかり勧めるのではない、要は花卉園藝が普及して、花の日本に仕度いのである。以下記す處の作り方によつて、之を實地に應用せられんことを希望する。

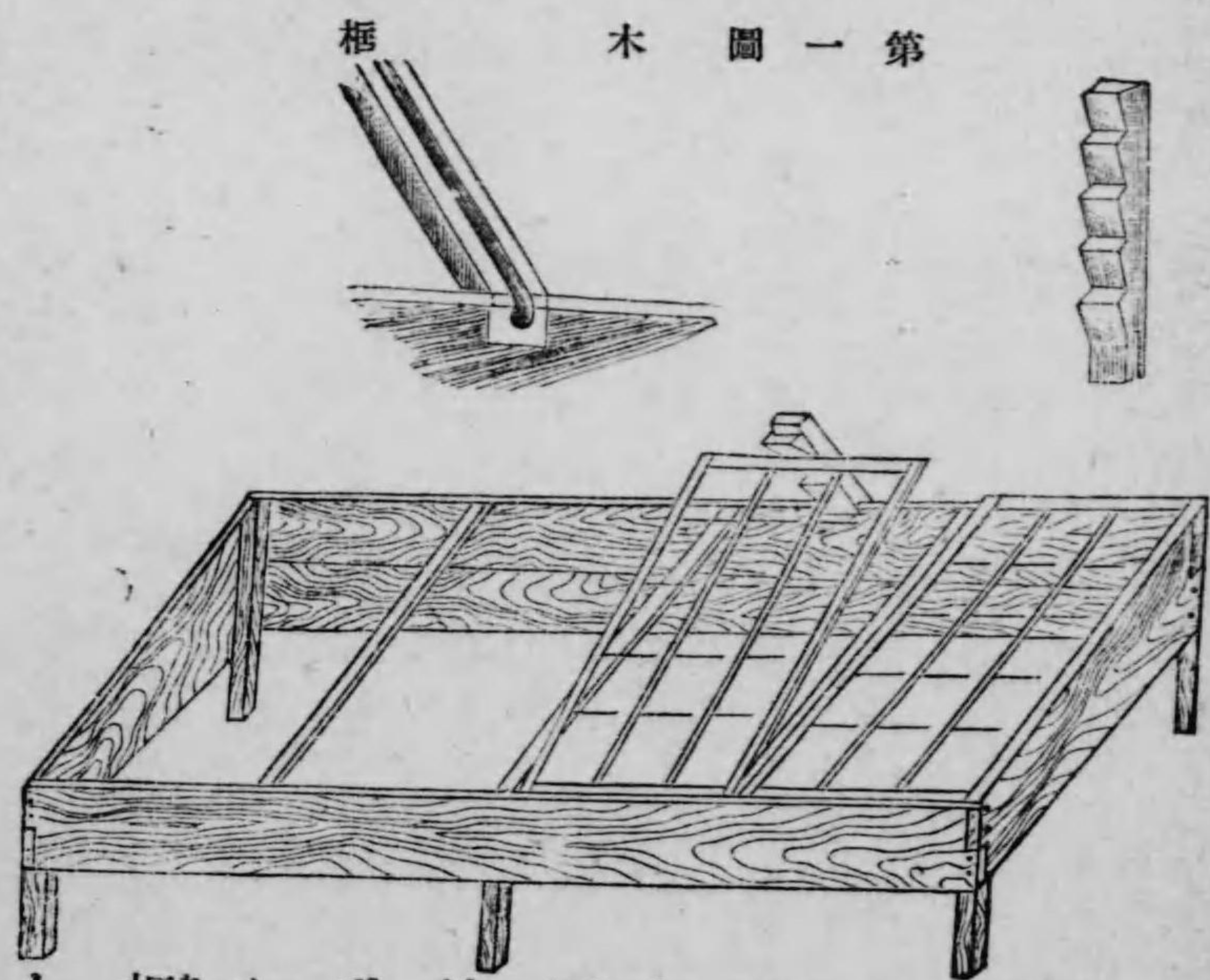
二、花 園

花ものの栽培畑は皆花園である。此栽培を營業とするものは、地質が適するか否か、日當りがよきか悪きか、位置が如何であるか、運搬は如何であるかといふ事までも研究してかゝる必要もあるが、家庭の樂しみとして、庭の一部を之にあてはめる仕事ならば、此自然的の關係、障碍等は如何することも出来ぬであらう。又如何する事が出来んでも差支ない、それ／＼適當な種類を撰び、適當な方法をとりに行かれぬ事もなからうか。

新に花園を作らんとするならば、先づ第一に成るべく深く土地を掘り起し、十分に土塊を碎き、雑草の根や小石などを取り除き置く。此仕事は冬の中に起して寒氣に曝らし、霜雪にあてると春までにはよく軟になりて耕し易くなる。春とならば又すき起し堆肥、下肥等の基肥を混ぜ、それ／＼植ゑつけべきものに適當に整地をする。

一二年草の如く種子を蒔くものゝためには苗床を作らねばならぬ。苗床には冷床

第一圖木框



と温床とある。冷床は日當りよき南向きの位置に地をかぎり、土を平地より五六寸高く盛り上げてよく均らし、細目の篩にかけて、土粒を細かにして造り、植物の種類によりて細砂を用ひねばならぬこともある、土粒さへ細小ならば肥料分の必要はない。温床は落葉、馬糞、堆肥などを埋めて熱を醸させた床で、此熱の散ぜぬ様に簡單の場合には藁圍にして防ぎ、もし用意が出来たらば木框を造る、木框を後は一尺五六寸、前は八九寸の幅として板にて圍ひ、四隅に木の足をつけ底

なしにして上にガラス戸を架し開閉の出来る様につくり、之を床の上に置き、其中にて苗を仕上る、これならば寒中에서도種蒔きが出来から、熱心な人は必ず一つは用意して置くものである。

花園に植付た後の色々の手入れは各草花の下に書いたのを御讀みなさい。

三、花壇

花壇の造り方は、色々ありますが、いづれも美観本位で、形ちがよく彩色の配合がよく、見て氣持のよい様につくるが上手なのである。作り方にも色々あつて、毛氈花壇といふのが芝生などの中に矮性の草花類で花毛氈を敷いた様に色々の模様をあらはすのである。垣花壇といふのは、庭の周圍や建物などに沿ひて植ゑるので、これは一方からだけ見る様に前程低きもの後ほど丈の高きものを植ゑるがよい。又リボン花壇といふのは庭の通路などに沿ひて、細長く曲るなり眞直なり、路次第に

リボンの様に植ゑ込むのである。

花は年中花壇に絶えざる様に配當したならば申分はない、それには花の季節をよく知つて置く必要がある、各種の條下を見れば分るが、こゝにも参考のため、大略を分けて示さう。

春の花

さんしきすみれ、きんせんくわ、あらせいとら、シネラリヤ、むきなでしこ、やぐるまさう、わすれなぐさ、ひえんさう、くじやくさう、まんじゆぎく、びじよさくら、フロックス等。(以上一二年草)

ふくじゆさう、ひなぎく、アルメリア、さくらさう、さぎごけ等。(以上宿根草) すわせん、クロイカス、ヒヤシンス、チューリップ、アネモネ、ラナンキュラス、ムスカリ、フリージャ、オキザリス等。(以上球根類)

夏の花

きんせんくわ、やぐるまさう、ひえんさう、くじやくさう、まんじゆぎく、びじよさくら、(是等は咲き續き)スキートビー、かひざいく、まつばぼたん、てんにんぎく、ひやくにちさう、ほうせんくわ、ロベリア、はるしやぎく、るからさう、あさがほ、べにばなサルギア等。(以上一二年草)

アルメリア(是は咲きつゞく)カーネーション、おだまき、さきやう、をみなへし等。(以上は宿根草)

グラチオラス、ゆり、カンナ、ダーリア、はなしやうぶ、かきつばた、あやめ、イリス等。(以上は球根類)

秋の花

びじよさくら、べにばなサルギア、ひやくにちさう、るからさう、かひざいく(是等は咲きつゞき)、けいとら、コスモス等、其他春蒔きのひえんさう、むきなでしこ等。(以上は一二年草)

アルメリア(咲きつゞき)、しをん、さく。(以上は宿根草)
ダーリア、カンナ(是等は咲きつゞき)。

是等には花期の長さもあれば短きもあり、又丈低きもあれば高きもあり、同種類でも、矮性もあれば大に伸びるものもある故、よくくえり分けて植ゑるがよい。僅に此書の名の通り三坪だけの花園では大じかけな花壇は造れぬが、それぞれよき様に廣さに應じてお作りなさい、大きくも小さくも樂しみに變りはありません、又廣くして人手にかけるよりも、狭くても自分で作つた方がどんなに愉快でせう、樂しみのため、利益のため、自然を愛するため、我身の健康のため、切に花園いぢりを御勧めする。

四、一二年草類

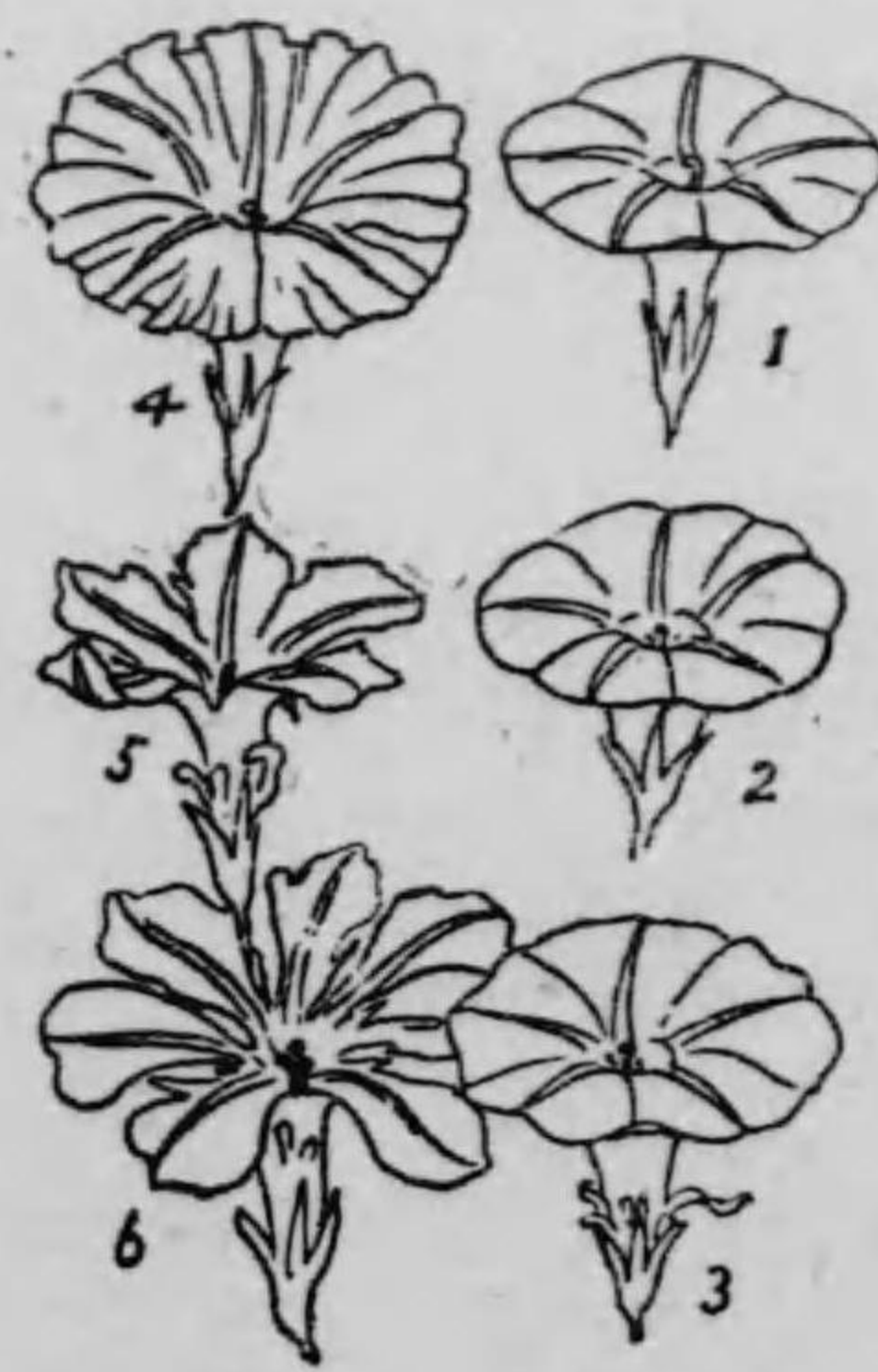
あさがほ(牽牛花)

旋花科

露のひぬ間の朝顔に朝寝を戒められる方も、少くはないでせうが、殊に垣に旭の昇るをまちかねて、朝な夕なしく笑ひ出す、此草花は古き昔に支那より傳はりて、種子を薬にしたのが起り、それよりだんく長き年月を経て遂に今日の様に盛に作られる様になつたのです。嘉永安政の頃より此栽培が一層盛になりだんく珍らしい變り物を作り出す様になつた、近年はこれが更に一倍隆盛になり、全国内處々に品評會、研究會が組織せられる有様である。斯く研究栽培せられ、極めて多數の變種が出来、珍花奇品も多く、米國あたりへも輸出されるまでに發達した。

花の性 元來あさがほは到つて變化し易い草であつて、今日では千を以て算ふる

花の別特 圖二第



- 1 並性
- 2 渦性
- 3 獅子性
- 4 亂菊性
- 5 桐性

い、並性 のものは莖細く、葉は並葉といひ普通の三裂のもので、葉肉が薄い、

程に多いですが、此變化は偶然ではなく、系統的に來るもので、其原は五種に分れてゐる、そして何れの變種も、此五種の中から出來るのである。五性とは、並性、渦性、獅子性、桐性、亂菊性に於て、如何に變化しても此五性の外にはならぬものである、そこでよく氣をつけて見ると一輪の花、一片の葉にも、此性が現はれてゐるもので、容易く鑒別することが出来るのである。雌雄蕊を備へた並花が咲いて種子を結ぶを親木といひ、其種子を多數播いて見ると、中には葉も花も著しく變形するものがある、この變り物を出物と稱する、五性の特徴は次の通りである。

葉の別性 圖三第



- 1 並性
- 2 獅子性
- 3 渦性
- 4 亂菊性
- 5 桐性

此特性を持ちつゝ變化する。花は五曜の丸咲（即ち曜といふのは花瓣の中央に細き

二線を見る、此間を曜といふのだ、花の筒部は常に長く、此性を有しながら、色々に變化する。

る、渦性 のものは、莖短く大きく、並性と桐性との間、葉柄短く、葉は渦葉というて、葉の兩方の翼が葉柄に近く渦の様に巻き重なり、葉面に光澤あつて肉厚く、花は渦川咲

きといひ、並性よりは筒短く、花冠が盞形の五曜丸咲でよく開く。そして出物は皆此葉と花との特性を受けて變化する。

は、亂菊性 莖は並性と似て居るが、葉は亂菊葉又は七福葉と稱し、葉柄が長く

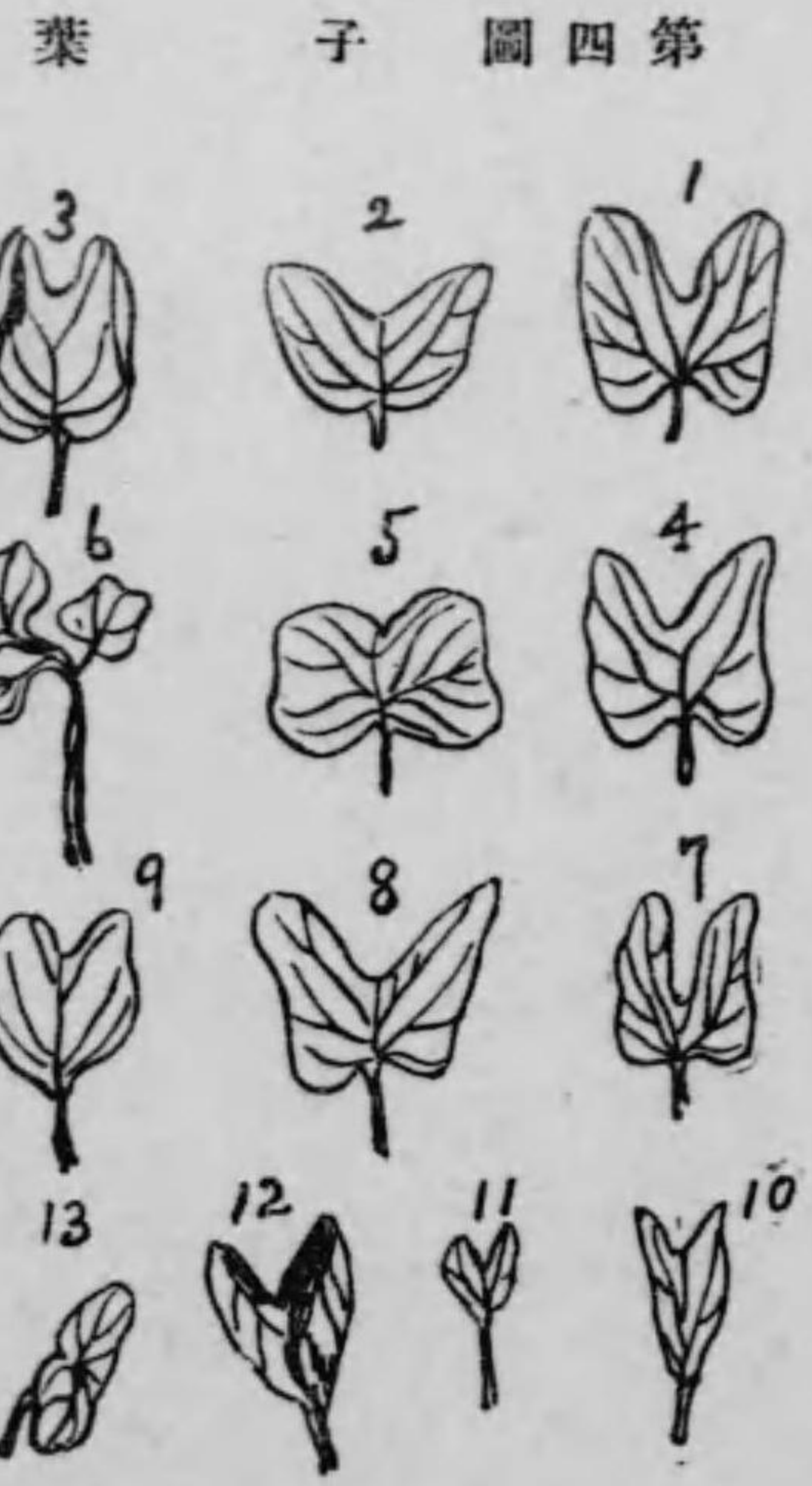
て、翼は左右不同、其上に小さき副葉などあつて至つて不整である。花は波形に多くの襞ありて切れこむ様に見え、曜數も多く、輪も大きい。

に、獅子性 莖は並性と同じきも、稍細く且つ伸びる性がある。葉は先端鈍く尖り、兩翼が張る、葉柄は並性よりも長く、光澤は同じ位、肉は薄い。葉の變化する時も皆此性を脱することがなく、且つ抱葉といひて葉面が内に巻き込む性がある。花は獅子咲といふ、花筒に縦襞があつて五曜ある。又筒の側に小さき瓣のつけるもの、瓣の幾つにも切れるもの、又毛咲と稱して花瓣が悉く毛の如く細く裂けることもあり、又裂けたる瓣の先きに袋形の小花瓣をつけるもある、これを風鈴咲といふ。花は小さいけれど出物の變化の烈しく、花形の奇なることは、此性のものが一等である。

ほ、桐性 莖は太い、時には棒の様になることもある。葉は桐葉というて、左右の翼が不同で、葉面粗く光澤なく、毛多く葉柄がない、花は六曜で筒の肉厚く、少

しく襞あり。花冠切込みて六瓣に分れるものがある。又小花瓣の幾つもついてゐるものもある。出物にはすばらしく立派な花の咲くことがある。但し風鈴や鳥兜はつかぬ、しかし桐性に獅子性が混じると頗る變化の多い花を見る。

- 1 並性
- 2 渦性
- 3 立田葉獅子性
- 4 桐性
- 5 亂菊性
- 6 同上
- 7 立田系
- 8 南天葉
- 9 手長筋
- 10 柳葉
- 11 燕筋
- 12 雨龍葉
- 13 葉柳葉



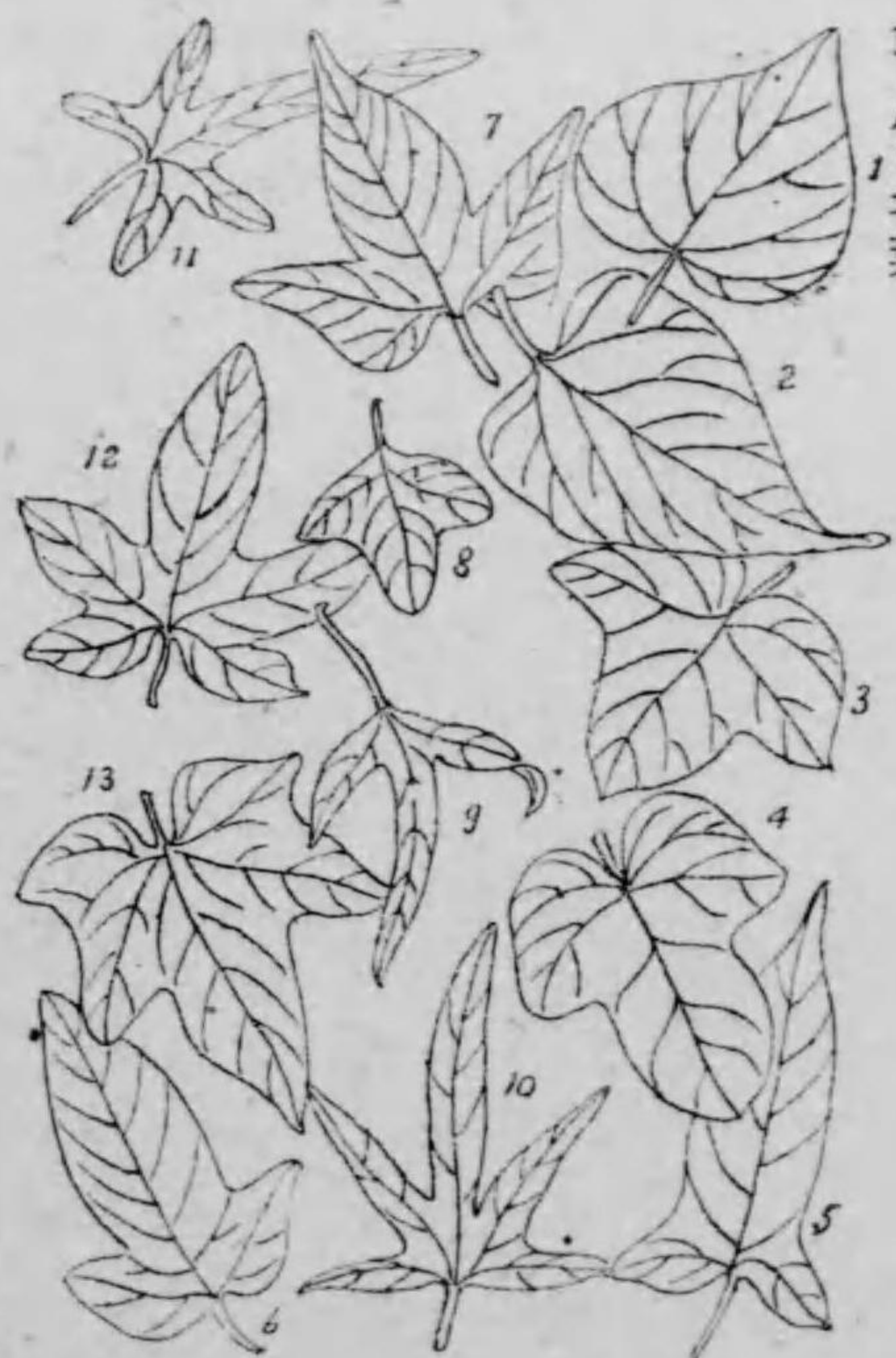
葉の變化 前記の通り、五性ありて葉に差異を見るが、これは本葉ばかりでなく、子葉にも種々の變化が現はれる。

並性の子葉は、普通の形で、肉薄す。

渦性の子葉は、形小さく肉厚く、

先端の割れが広く開き、莖は短く強す。

一の葉り變のほがさあ 圖五第



- 1 丸葉
- 2 梅葉
- 3 雀葉
- 4 洲濱葉
- 5 施花葉
- 6 鉄形葉
- 7 飛鳥葉
- 8 楓葉
- 9 鷄足葉
- 10 槭葉
- 11 蜻蛉葉
- 12 立田葉
- 13 八ツ手葉

亂菊性の子葉は丸みを有し、又數個の小葉を有するものもある。
 獅子性の葉は形長く、葉縁は抱へ氣味に卷込み、葉の先きの開きが渦性より狭く、
 莖は一般に長し。

桐性の子葉は、多くは肥大し、光澤薄く、葉面に凹凸あり、又抱へ葉などもある。つて變化が多く良品を生じ易い。

尙葉に種々の形があつて種々なる名稱がある、これは勿論五性の何れかに屬する變化であるのだ。大略を

二の葉り變のほがさあ 圖六第



- 14 荅葉柳葉
- 15 糸柳葉
- 16 海松柳葉
- 17 唐草雨龍葉
- 18 掬水雨龍葉
- 19 掬水葉
- 20 雨龍葉
- 21 南天葉
- 22 林風葉
- 23 林風葉

に反へる傾きがある。

細葉筋の子葉は形小さく細脈多く且つ明かである。
 手長筋の出物の子葉は葉柄の付け根が凹んでゐる。

説明して置くこととする。

立田系の子葉は一般に細長く、兩葉尖が狭く深く葉面の細脈は明かでない。

笹系のもは形様々で、脈多いけれども明かでない、縁は抱へ氣味を有する。

南天系の子葉は葉柄の付け根が凹み、兩葉尖が離れ、裏

燕筋の出物の子葉は細葉筋よりも小さく、脈は少ない。

本葉 種々の形が澤山ある大略を説明する。

並葉 普通の三分裂の葉で、各部の先きは尖つてゐる、又中央部の特に長さを尾

長葉といひ、此部の特に短さを雀葉といふ、獅子性によく出る。

鋏形葉 並葉の中央部が特に發達して慈姑の葉の形に似たものをいふ。

笹葉 並葉の一種で、兩翼があまり張らぬいくらか笹形のものである。

楓葉 笹葉に似て中央部は短く、桐の葉に似たる葉である。

飛鳥葉 は兩翼の張つたもの、

笹龍膽葉、鶏足葉 三部の細く切れたる葉。

洲濱葉 並葉に似て、先端鋭からず、此種の子葉は亂菊のものに似たれど、切る

ゝことなし。

千鳥葉 前葉に似たるもので缺刻深く、葉尖とがる。

立田葉 五裂して楓の葉に似たるもの。

槭葉 は立田葉の更に細きもの。

八手葉 は缺刻浅く幅の少しく廣きもの。

丸葉 葉の丸形のもので、此種の中には其形によりて孔雀葉(長味をなす)梨葉、

葵葉などある。

南天葉 三枚の複葉の如く南天の葉に似たるもの、一種蝙蝠南天、枝打南天葉な

どもある。

蓮葉 葉柄が中央より出でて長きもので、手長性によく見る。

柳葉 細長くして柳葉の如きもの、其形によりて海松柳葉、荅柳葉などいふの

がある。

掬水葉 葉の縁が表の方に抱へたるもの、即ち水を掬ふことの出来る様な形に捲

り込みたるものをいふ。

抱葉 掬水葉よりも淺く抱へたるもの、形によりて立田抱葉、千鳥抱葉などある。
林風葉 葉柄の葉につく部の廣がりたるもので、形は一定しない。多數分裂したるものを林風葉、更に變化したるものを寶葉などいふ。

握葉 掬水葉の一層強く抱へたるもので、手を握れる様な形のもの。

象鼻葉 握葉の一種で、葉の先端に象の鼻の様に巻き込みのあるものをいふ。

雨龍葉 葉が細く捻れ巻きて恰も龍の如き形のことをいふ、これに數種ある。

絲雨龍、枝打絲雨龍、唐草雨龍。これらは何れも立田系か笹系に出づることが多い。

葉の地合 葉の形に種々の變化があるばかりでなく、地合にも種々ある、其主なるものは次の通り。

並 普通の平な地合。

石目 並よりは少く粗雜なる地合。

縮緬 地合に細かき凹凸ありて縮めるもの。これに數種ある。

蛇腹 葉脈が波形をなしてゐるもの。

砂摺 砂を摺りこめる様に細かき凹凸あるもの、縮緬に比すると平である。

打込 小ざさくぼみが、處々にあつて指でも打込んだ様に見えるもの。

葉の色 これまた種々様々である。其主なるものは、

青葉 並の綠色のもの。

黄葉 黄ばみたるもの、

間黄葉 青葉と黄葉との中間のもの。

生色 白の少しく鈍色のもの。此色のもの日光に弱く、栽培が困難である。

以上は一枚の葉が同じ色のときの事であるが、實際には裏表の異なるもの、晝夜(三色のもの、綠黄のもの(松島)、白、黒、黄の覆輪のものもある。又葉面に種々

々の斑入もある、白斑、黄斑、水晶斑(純白)、松島斑(黄に綠)、虎斑(虎の毛皮の

様な紋)、三色斑(綠、黄、白)などある。

第一花變のほがさあ 圖七第



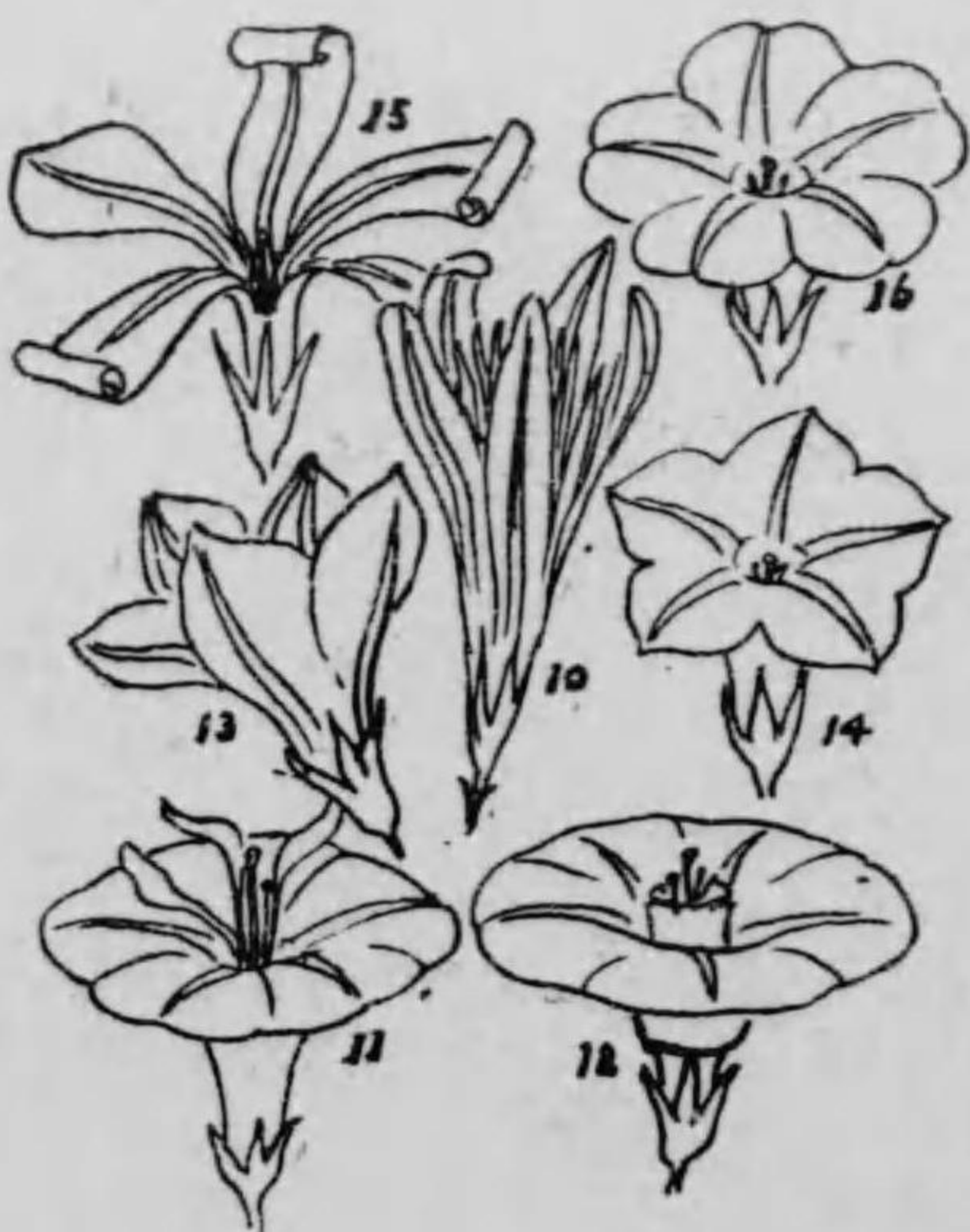
- 1 二重咲牡丹
- 2 三段咲牡丹
- 3 筒牡丹
- 4 采咲牡丹
- 5 臺咲牡丹
- 6 菊咲牡丹
- 7 毛咲牡丹
- 8 風鈴咲牡丹
- 9 管咲牡丹

花極めて變化の多きもので、葉の變り物も黒人間には珍重せらるれど、花の變り物は誰にも珍らしく見らるゝ、先づ外輪から話を始める。

通常萼は五つの萼片に分れるが、數の多いものもある。並性、獅子性のものは多く並萼、渦性に多きは淺萼、桐性には桐萼、其他唐松萼、大萼などいふものがある。

花冠 頗る多數の種類がある、五性を記した處に大體は説明したが、まだく變化がある、其主なるものは、

第二花變のほがさあ 圖八第



- 10 茶茶咲牡丹
- 11 孔雀咲
- 12 臺咲
- 13 龍膽咲
- 14 桔梗咲
- 15 卷絹咲
- 16 梅咲

靴咲 龍膽咲に似て、各片が抱へ氣味のもの、
 采咲 花冠が多數の片々に全く裂けるもの、
 撫子咲 采咲に似て各片の先端が撫子の花の様に深き鋸齒状に切込めるもの、

丸咲 普通の漏斗形の合瓣花冠。
 梅咲 梅花の様に合瓣花冠の先端だけ五つに裂けたるもの、
 櫻咲 五つに裂けた各片の先きが少しく凹めるもの、
 桔梗咲 これも五片に裂け、其各片の先きが尖れるもの、
 龍膽咲 桔梗咲に似て、花筒の部の長さもの、

菊咲 多數の片々に切れて、それが上向して内部に向ひゐるもの、
 絲咲 花冠が糸の如くに細く／＼切れたるもの、
 臺咲 丸咲であつて花の中央がたゞみこみ茶臺の如き形となれるもの、
 茶臺咲 花冠が細く裂けて茶臺の如くに内に向つて抱へこめるもの、
 車咲 又雀咲ともいふ、臺咲の五片に切れたるもの、
 玉垂咲 總風鈴の垂れ下れるもの、
 管咲 風鈴なくすべて細き管状になれるもの、
 毛咲 又髭咲ともいひ、極めて細く裂けたるもの、
 此外已に五性を説明せる部に獅子咲、渦川咲、唐花咲、亂菊咲等を記したれば、
 それらをも照らし合せて見よ。
 すべて花には一重と八重とありて、以上の花形中の丸咲、撫子咲、臺咲等はいづ
 れも一重咲にて、種子を得るには必要のものなれど珍奇を主として賞観するには價

値が乏しい、そこで一重咲きものは採種の親木として栽培するのみにて、出物
 即ち珍奇の八重咲を得んとして力を盡すのである。
 八重咲といふのは、要するに雄蕊、雌蕊が花瓣に變化するのであつて、雄蕊だけ
 一部若くは全部が變ずることがあり、又雌蕊も變ずることがある、若し雄蕊が變化
 してあつても、雌蕊が完全である場合には種子を結び得るのである、そして此八重
 咲きは何の種類にも咲くとはいはれぬ。
 八重咲きにて雌雄蕊が全部花瓣に變化したものを牡丹咲といふ。即ち此咲き方は
 八重以上で千重咲といふべきものである、これは決して種子を結ぶことがなく、前
 に記した親木によりて種子を採取し、これを播いて多くの苗を得、其變化したもの
 を判断栽培して得べきものであつて、大に技術と熟練とを要する譯である、此咲方
 に色々の種類のあることは圖によりても大體は分るでせうが、千差萬別といふべき
 程、種々の狂咲が生じ、とてもあさがほの花とはちもはれざる様な花が咲き出づる、

三段咲の牡丹とか、菊咲、撫子咲の牡丹とかいふものは、實に見事な美しい花である。

花冠の變化は尙多數あるから、實地について研究して御覽なさい、非常に興味のあるものである。

花の色 花の色も亦花形に變化がある様に種々様々で變化が多い、普通に見るは紅、紫、紺、白を始め、鴉色、董色、藤色、葡萄色、空色、淺黄色、茶色等數へされぬ程にかはる、そして其色合は花冠の上部下部にて違ふものがあり、又色々の絞りがあり、覆輪とて縁だけが他色を有するものがあり、花筒のみが他の色を有するが(底紅、底白)。花笠とて花冠の縁廻りの薄くぼけたのがある。吹掛絞は白地に或色を吹きかけた様な絞。鳴海絞は吹掛絞と似てゐるが、花筒に近い程、絞りの多いもの。抜絞は地色が濃くて絞の薄いもの。村雲絞は地色と違ふ色か又は濃き色で大なる斑のあるもの。其他友禪絞もあれば刷毛目絞などいふものもある。

種類 花の性や形や、又は葉の變化其他につきて記したのを見ても、多くの種類のあることは解られたでせうが、あさがほの種類として、花の形状咲方から、種類を分て見れば、大輪咲種、八重咲種、牡丹咲種の三種になる。

大輪咲 丸咲の大形な花を着けるもので、葉は鋏形葉、千鳥葉などである、成るべく大きく咲く品種を選んで作らなければならぬ、巧に作る人は花の徑六七寸にも咲かす。

獅子咲 花の變化の多きもので、風鈴咲、毛咲、管咲などになる、多少雌雄蕊を存するもあれど、中には全然變化せるものもある。其場合には獅子牡丹といふ。然し此花は花形割合に小さく目立たぬ感がある。子葉が抱へ葉をなすので之を見て出物を判断することが出来るから、割合に作り易い、但し親木をも栽培して種子用にせねばならぬ。

唐花咲 桐性のものに出る、所謂唐花八重である、若し雌雄蕊を失ふたものなら

ば唐花牡丹といふ、この花は花瓣の数が多く、大形となり風鈴鳥兜もつき、實に立派な花となる、子葉は肉厚く凹凸多く毛茸の多いものを選び、いふまでもなく、種子は親木より採らねばならぬ。

牡丹咲 臺咲牡丹、菊咲牡丹、采咲牡丹、撫子咲牡丹、車咲牡丹、獅子咲牡丹等皆全く雌雄蕊を失つた花をいふのである、よし牡丹咲となりても花のはつきり開かぬ筒形のものあまり貴ばれぬけれど、風鈴、毛、管瓣、鳥兜などを伴ひて藝の多いもの程珍重せられる、總鳥兜噴上車咲牡丹、總風鈴獅子牡丹又は二段咲、三段咲等になると容易に得られぬと同時に非常に愛観される。

此種を得る目的で作るには大に熟練を要する、先づ親木の選び方が上手でなければならぬ、従つて播いた種子より一割の出物を得たならば上等の成績である、その上子葉を見て出物を判別することが六ヶ敷い種類の苗は成る可く多くの小鉢に植ゑて置き、蕾の現はるゝを待て探りあてるのである、之を探り牡丹といふ、二然し手

長牡丹は其性によりて子葉にて判り、又白莖種の軸牡丹も子葉の莖白く之に親木の花と同色の斑點の來るものが牡丹咲であるからこれも割合に栽培が容易い。

蕾をとりて牡丹咲か否かを知る法に二つある、一は切開法として、蕾をとり縦に切り、内に白き小粒のあるなしを見る、もし有らばそれは雄蕊の葯であるから、其花は牡丹咲にならぬ證である。二は聽音法として蕾をとり指にて耳につけて壓し潰して其音を聞く、音のするのは内部が虚である故で、牡丹でない證だ、牡丹咲きは花瓣が多く内部が充實して居るからつぶしても音のせぬものである。

變葉種 葉形の著しく變じたものを特に珍重するものもある。木立になりて蔓にならぬものや、細葉種などは皆此部に入れべきものである。

作り方 種子の選み方 種子は普通黒いけれど、又白きも黄色も茶色もある、形も圓いもの長いもの肥えたもの瘠せたものなどある、そこでどんなのがよいかといふ事も確とは出来ないが、大輪咲ならば圓く肥えて重いのがよい、變り物は其種類

によりて種々見分けねばならぬ、つまり判然とはいへぬが、子葉の形がちのづと種子に見えて居るから、それを記憶して判断するのである、桐性のものは圓味があつて凹凸のある肥えた種子がよい、その故は此出物の子葉が厚く平たく大きく上下に反轉し、凹凸が多いからである、手長筋のものならば、肥えて然も小さいがよい、それは此出物の子葉は小さく稍厚いからである、其他變り物は種子が瘠せて小さく、皺があつて凹凸の多いものを播けば、屢珍花珍葉のあさがほが生ずるものである。大體に於て種子を選び分けられた後、一晝夜程水につけて置く、此中早く水を吸収して膨んだものは強壯な種子であるから、大輪咲種は之を播いてよいが、變り物種ならば反對にかゝる種子は變化が少いから、これは取捨して、残りの弱さうなものを播く、水を吸はぬ位のもは兎角發芽も困難であるから、早く吸収し得る様に、種子の一方の少し凹んだ部の芽のある所を少しく皮を剥きて播く、畢竟するに此水浸法は只外部を見ての肉眼鑑定法と併せてあさがほ栽培上の一進歩といはるゝ、かく

て肉眼鑑定のみにて播いたものから、一割の出物があるとすれば、此の水浸法を行へば更に一割出物を多く得べきからである。

種子の播き方 種播きには床播きと鉢播と二法ある、床播きの時は日當りよく風通しもよき位置を選び、高さ四寸位の底無しの木框を用意し、床の位置にのせ、砂質の軽い床土を篩込む。此の時に粗き粒を下に入れ、細かき粒を上面にして地面を均らし、種類毎に區別をつけて播く、區別毎に番號又は名札をつけて置く、種子を丁寧に播いた後に、細土を篩にてかけ二三分の厚さに蔽ふ。そこで細目の如露で水をかけ、其上に薄く藁をかけて置く、尤も此藁は芽が出たなら直に除くのである。特に早く發芽する様に、種子を濕らして皮を剥くがよい、其位置は種子の少しく凹める部の側である、三四日も経れば芽を出す。

鉢播きの場合は小鉢播きは兎角乾き過ぎるから、大形の平鉢がよい。土は篩ひ残りの粗きものを下に入れて、上に細粒を入れ、種子は皮を僅に剥きたるものを丁寧

に下し、其上に二三分の厚さに土をかけ、水を如露にてそぐこと床播きと同様である、又上よりかけずに鹽に鉢の底を浸して吸ひ上げさせてもよい。此鉢の代りに木製の箱などを用ひてもよい、兎に角鉢播は床地と異りて何處にでも移動し得る便利はあるが、乾燥することのない様に灌水の手數がかかる。苗の發芽の後に一旦三寸位の小鉢に移し徒伸びをとめて置いて、それより五六寸鉢に本植にする。然し手長牡丹や相性のものなどは生長が鈍いから、假植せずに、直に大鉢に植ゑるがよい、又假植のときは一鉢に二三本宛植ゑるが、大鉢に本植ゑる場合は一本づゝに限る。移植に際して注意すべきことは、まづ第一に花の頃になりて子葉は青々と殘つて居る様にするのが、栽培家の手腕であるから、苗が出たならば、子葉の開くを待て早く植ゑて了う、最早本葉のさした後であると、子葉の殘留は殆んど望まれぬ、そこで移植のときは竹筥の類にて苗の根を傷めぬ様に丁寧に抜きとり、鉢には八九分通りに肥えたる植土を入れ、之に植ゑこむ、特に名稱や番號を誤る事や混ざる事の

なき様に注意する。

季節 播種の季節は八十八夜前後を可とするが、暖地では四月下旬、寒地では五月中下旬で宜しい。とにかく暖氣を好む草であるから、春霜の降りる中は播れぬ。

植土 土は播種には軽き土の肥料分に乏しい處で結構である、否寧ろ瘠地が良いといふ程であるが、鉢にとる場合には十分に肥料分を含む肥土でなければならぬ、培養家は色々苦心して之を造るが、一例を示して見るならば、壤土四分に細かき川砂一分を混じ、之に馬糞五分をまぜ、よく腐熟した人糞尿を多くかけて雨露に逢はぬ所に永く貯へ置き、大抵乾きたる頃に篩にかけ、此土一斗に過燐酸石灰一合と油粕九合をまぜ、春の中に造つて置く、之を鉢に入れ水をかけ、乾きたる時に鉢際に隙が生ずるものならば、土が重過ぎるのであるから、其場合には尙砂と腐植土などをまぜて軽くせねばならぬ。

肥料 最も貴ばるゝ肥料は油粕である、これは粉末のまま、施す者もあれど、矢張

り液肥としてやるがよい、先づ水一斗に油粕一升位の割にて溶かし数々攪きませせて酸酵させ、粕が下澄みて上澄の出來るをまち、之を汲みとり五六倍位の水に薄めてやる。智利硝石、硫酸安母尼亞などの化學肥料を用ふる者もあれど、之を施すときは肥しまけのせぬ様に十分に薄めたものを用ひぬと、苗を枯らすことがあるから氣をつける、先づ水一斗に一二匁の割で十分である。又肥料をやるには決して葉にかけぬ様にする、若し誤つてかけだならば直に水を如露にてそゞぎて洗ひおとす、肥料をやる時刻は晴天の夕方などがよく、手長牡丹、唐花牡丹、大輪物などは肥料を十分に與へるがよい。

人糞尿や大豆粕なども悪い肥料ではない、元來油粕を良肥といふのは都人士の最も取扱ひ易い比較的清潔でない者であるからで、若し之を厭ふことがなくば下肥などを用ひてもらひない、最も此肥料は十分に腐敗酸酵したもので、よく薄めて用ひるのである。

肥料のやり方は移植の後一週間位で一回やり、其後は十日目位にやるのが、普通の場合適度である。

灌水 灌水は特に注意してやらねばならぬ、先づ播種の後、床なり鉢なりが、常に適度の濕氣を保つ様に、目の細かな長口の如露を用ひて、水をそゞぎ、苗を移し植ゑた後は、朝と日中と一日に二回位水をやる、日中にやるときは葉にかゝらぬ様に根元にのみそゞぐが、朝は葉からかけて葉を洗ふ方がよい。大鉢に本植ゑした後も同様に水をかける、但し日中の水は汲置きの日向水がよい、灌水の量は多過ぎる事のない様に氣をつける。尙炎天の候になると、朝と日中の外に夕刻にも與へる必要がある。然し水を與へ過ぎると徒伸びするから、それも心に留めねばならぬが、伸び難き性の者はまたそれに應じて適當にせねばならぬ、又明朝開花する蕾を有する場合には十分にやらぬと、開花が不十分であらう。それに尙ほあさがほは著さを好む草ゆゑに日中は十分に日光にあて萎れる位にする方が普通の場合良き成績を擧

げるものである。

仕立方 蔓を伸ばして支柱を與へると、莖をつめて木造りにするのとある、種類によりても其仕立方をかへねばならぬ。

い、行燈仕立 鉢に五本の葎、高さ約二尺のものを同じ間隔に立て、三段に竹輪をとりつける、先づ鉢より四寸位の高さの處に、鉢の大きさと同じ位の竹輪を結びつけ、その次ぎに少しく大きな輪を中段に結び、更に略同大の輪を上段に結びつける、出來上の形は丸行燈の様である、然し人の好みによりては種々の形につくりても、何の妨げはない。蔓は左巻き即ち時計の針の廻りと反對であるから、其心得で輪の下段から巻かする、日中の蔓の萎れ氣味のときが、此取扱に最もよい、下段を一周した後には中段に及び、此輪には二三重にまきつけても、成るべく上段には巻かぬが、形が見よい、下段から中段に移る頃に花を咲かするのが上手といはれるのである。

る、如意式仕立

これは木造りにするので、大輪種などに施して雅致があるが、伸び難きものには適用されぬ場合がある。其仕立方は本葉五六枚になつたとき、四葉残して心を摘みとり、新芽を出さして三本だけ育てる、それより、三四葉出づるのを待ち、まだ蕾が出來なければ、更に一葉を残して切る、そうすれば必ず蕾が見えそめる、そこで各の蔓に蕾を四つづゝ仕立て、其外の側芽は出るにつれて摘みとりて三本丈けに止め十二の花を見るのである、此花が終らば、枝元からさりて、別に二番蔓を仕立て、それより三番蔓まではくり返してあとは採種用とする。但し二番蔓後は一重咲きには施すけれど、變化物には不適當である。

花銘のつけ方

あさがほの名ほど複雑で面倒なものはない、菊や、花菖蒲などいづれも簡単な雅名がつけられてゐるに關はらず、あさがほばかりは素人には分らぬ程である。併しこれは實に止むを得ぬ理由があるのだ、それは丸咲きもので變化の殆んどない種類には大極殿とか、谷間の霧とか簡単な名で差支はないが、葉に花に變

化の極りなき牡丹咲、獅子咲等に、もし簡單な名をつけたなら、同じ名で大變に違つたものが生じ、何が何やら判断が出来ぬこととなる、それ故複雑を忍んで葉、莖、花すべてを説明的にいひつらねるのである。即ち葉色(黄、青斑入等)。葉の地合(石目、縮緬等)。葉形(掬水、雨龍等)。性(手長、桐等)。花色(紅、絞等)。花瓣(風鈴、鬚等)。咲方(丸咲、三段咲等)。花質(獅子、牡丹等)。これらを並べる、と法性寺入道前關白流の長文句とはなるが、然し名で悉くわかるわけである例へば、
 青常葉紅色丸咲大々輪
 青渦打込砂摺羽衣林風爪龍葉紅紫吹上風鈴撫子牡丹

あらせいとら(紫羅欄花)

——十字花科——

草もやさしければ花も優しく、普通は單瓣で赤ですが白や紫もあれば、又八重もありです。歐洲種の一二年草で二尺位になり、葉は柳葉の様に細長く、白き短

き茸毛にて覆はる、花は總狀花序に連り、春より夏かけて咲く。果實細長く二三寸になります。

作り方 春秋いづれにもよく、苗床に種子を下す、春夏に咲かするには秋九月頃に播き、夏秋に咲かせるものは春三月頃に播きます、然し多く秋播きにします、苗が二三寸に伸びるを待つて鉢や花壇に植ゑ、一二回水肥をやります、東京附近の寒氣にはちつとも弱りませぬ大丈夫な花です。

かんげいぎく(金鷄菊)

——菊科——

細き長さ莖の上に、黄色の舌狀の周圍花と紫褐色の筒狀の中央花とで、可なり強き色彩の花をつけ、花壇を飾るに至て普通のものです。葉は羽狀の複葉で、三枚より、七枚位の卵圓形の小葉より成り、莖は一二尺に伸びて、其頂に一個づゝ花咲きます。

三
作り方 春三四月頃か、又は秋九十月頃に種子を苗床に下し、苗の二三寸位に育ちたる頃、花壇に移します。植付のときに堆肥や灰を與へ、又育ちがちなはしからぬときは油粕、魚粕などの水肥をやりませす。

此花に似たる「はるしやさく」といふのがあります、草丈三尺位になり、葉は細く分裂し、花はよく似てゐる、作り方は前種と同様で、尙一層栽培し易く、一度播けば、年々種子がこぼれて獨りでに生じます。

きんせんくわ(金盞花)

菊科

名の通り全く黄金の盃の様な花である、春より夏にかけて徑一寸位の花が、あとからく咲き出る。花は他の菊科のものと同様に周圍に舌状花をつけ、中央に筒状花がさく。葉は長楕圓形で鋸齒あり密生し、高さ一尺にも過ぎねば花壇の寄植や縁取などにも適する。

作り方 種子を苗床に播く。其季節は普通秋の彼岸頃であるけれど、春に播種して夏秋にかけて咲かすも興味がある。苗が二三寸に伸びるを待ちて花壇に植込みませす。

至つて作り方の簡便な草で、肥料は一二回水肥をやるだけで澤山です。一種「たらきんせんくわ」といふのがあります、草立も花も稍大きく、葉に鋸齒がありません。

きんれんくわ(金蓮花)

金蓮花科

一名、のうぜんはれん

長き距がある不規則な光彩ある色の花と、蓮に似たる楕圓形の葉とは、可なり人の注意を惹くべき特徴です、葉は楕、花は兜で戦捷記念の標といふ學名を持つて居る草です。花の色は黄金色、金樺色、赤等で稀に絞りもあります。葉柄長く、莖

第九圖 きんれんわく



も著しく伸びて蔓の様になります。
又矮性のものもあります、これは特に鉢植に適します。

護を與へ置けば、春早くより、咲き出します、又春に入りて種子を播けば、夏より秋にかけて花が咲きます。花盛り長く、性も甚だ強壯で至極作り易く、花壇用として珍重さるゝ草の一種です。

作り方 種子は秋、苗床に下し、冬の間は寒さにあてぬ様に、木框にて保

くじやくさう(孔雀草)

一名、こうわうさう(紅黃草)

菊科

花の周りが黄色で、内部が天鵝絨の様な暗紅色の愛らしき頭状花である、單瓣

と重瓣とあり、葉腋から枝を生じ頂に一輪づゝ、春から秋まで咲き續く。葉は羽狀複葉で、小葉は細長く縁に鋸齒があり、草の丈一二尺位に止り、甚だ高からず、すべての性質は「まんじゆきく」を小さくしたるものと見ればよい。勿論これも英語にて「マリゴールド」といふ種類中の一種です、これにも莖や葉に異同があります。

作り方 春早く種子を苗床に下し、苗を育て、花壇や鉢に植えつけます。其時堆肥に油粕、灰などを入れると育ちがよく、其後にも折を見計りて水肥をやります。然し肥料が勝ち過ぎては草が出来過ぎて、割合に花がいちけますから、加減が大事です。又花の後、實を結ばせると草がよわり易いから、種子採りの草の外は切り去るが良い。

くわくからあざみ

菊科

紫に白に美しく咲き出づる此草は、葉は卵圓形より卵形の三角形、縁に粗き鋸齒があり、高さ二尺位に伸びる。莖葉には毛が生じ、初夏の候より秋にか

第十圖 くわくからあざみ



け咲く。

作り方 春彼岸の頃、苗床を仕立て、種子を下し、二三寸位に苗が伸びたならば、それより花壇に植ゑ込み、水をよき加減に與へると、育ちがよく、

盛に花がつかます。又一法、夏の末より秋かけて種子をまき、温室内に入れ置けば育ちが一層早く、冬の中から花が見えます。

けいとろ(鶏頭)
はけいとろ(雁來紅)

莧科

名の通り鶏冠に似た眞赤な肉張つた銀杏形に花のかたまりが、夏から秋にかけて昔から庭の一隅を飾つて居る。又黄花、白花もある、葉は細長く柳に似、莖の高さは三尺位迄になる。

けいとろの別種ふでけいとろ(筆鶏頭)といふのがある。普通は薄紅で穂の形に花叢が生ずる。

又ひもけいとろ(老鎗穀)といふのは花叢が紐の様な細長き穂を垂れ、赤か白で、草は二三尺になる。

はけいとろは前記の種類と少しく異り、長橢圓形の葉が長さ葉柄にて重なり合ひ成長するに至つて紅、黄など斑紋を生じ秋になると非常に美しくなる、然し花は葉腋に生じ小さく見て見るに足らぬ。

作り方 春三四月頃苗床に蒔き、淺く土をかけ、乾燥せぬ様にし、苗が二三寸のびるを待て花壇に移し植ゑる、堆肥、油粕、灰など良き肥料である、性質至て強壯

で作り易い草花である。

け し (罌粟)

罌粟科

蛇喰ふと聞けば恐ろし雉子の聲、阿片をとる草と思へばけはくしき花の色も何となく毒々しい感じがないでもない。然し大輪の羽二重地の様な花瓣はたとへ一日の眺めには過ぎぬけれど、花壇の名花の価値はある。之に二種ある。

第十圖 かなひ



い、普通種 並のけしは草丈三四尺にのび、莖の先端に花がつく、花は大きく、單瓣と重瓣あり、單瓣のものは花瓣が四枚、色は白、赤、紫、絞り、覆輪等様々、莖は二枚

で花開くときに落ちる、蕾の間は下方に曲る性がある、果實は球の形をなし、微細なる種子を無數に藏する。葉は葉柄がなく、葉片が莖を抱いてゐる、長さ楕圓形をなし、葉縁に缺刻があるか、又鋸齒があります。果實が未熟の中に刃物にて傷をつけると乳の様な液汁が出ます、之を乾かして藥用阿片を造り、更に精製して毒藥モルヒネをとります。さればけしは花を賞するばかりでなく、藥用植物として大に栽培を奨励すべきものである。

ろ、ひなけし(虞美人草) 草丈も花形も普通種より小さく、高さ一二尺に過ぎません、單瓣も重瓣もあり、色々様々、名の通り風にも堪へぬ様な姿で花壇に立てる趣は唐美人の柳腰にも比べようか。莖葉には毛を有し、葉は互生で、羽狀に裂けてゐます。

作り方 秋播と春播どちらもありませす。九、十月頃に播けば翌年春夏の交に咲き、春三四月頃に播いたものは夏秋の間に咲きます。然し通常は秋播にします。

苗は移植が出来ませんから植付けにする様に準備し、種子は極めて細いから、播いた後は、極薄く土をかけて押付け置く、發芽して一二寸にも伸びた頃に普通種は一尺四五寸置き、ひなけしは六七寸置の少距離に一株つゝの割に間引き、一二回水肥を施せば、よく育つて大花をつけます、特に花が終れば果實を結ばぬ様に切り込むと、あとから立派な花が咲きます、但し薬用として育てる場合は別です、又すべてけしの花は弱り易いものですから切花にはとてもなりません。

コスモス

菊科

やさしい、なよやかな、寧ろ淋しい、あはれな花であるコスモスは赤、淡紅、白の花をつけ、秋の中頃、赤とんぼの群れる頃より霜の降る頃までもさきほこる、矮性のものは三四尺に過ぎぬが、並性のものは七八尺にも達する。葉は細く裂けて糸の様である。

作り方 春三四月頃苗床に播き、苗の二三寸に育つを俟て本植をする、苗はのび易く、それに節々より根を生じ易いから、挿木にしたり、取木にしたりして矮性につくることが出来る、又夏の内に枝を切りつめてあまり丈けの伸びぬ様にするもよい、性極めて強壯であるから別段に肥料の多くを與ふるに及ばぬ、至て作り易い草花である、籬の側などに植ゑるに適する。

サルギア

唇形科

筒形の花が上下兩唇に分れた、不整な花で、色は紅で、大きく美しい、花期長く夏より秋の末までも花が咲きつゞく、葉は心臟形か、細長いかで、縁に鋸齒があり丈二三尺に育つ。

作り方 春三四月頃に苗床に種子を播き、葉が二三枚生じた時に、花壇に移し又は鉢植にする、種子はこぼれ易く採收し難き故に、秋の中に砂質の軽き土に挿木

アギルサ花紅 圖二十第



四八
して根を生じさせ、暖に保ちて之を越年させることがある。肥料には油粕の水肥が適し、よく育ちて花が、續々咲きつゞくものです。

さんしきすみれ(三色堇)

一名、いうてふくわ(遊蝶花)

堇菜科

東風の吹き初めるまもなく、世はまだ牙を返へる寒さをかこつのに、早くも紫、白、黄の三色とりくにいちらしく笑ひ出し、生長につれて咲きつゞけ六七月頃ま

でも眺められる、高さは七八寸位、もと舶來の越年草で、卵形より楕圓形の鋸齒ある葉をつけ、羽狀に裂けた托葉もあります、品種も數多く廣く作られます。

作り方 寒氣にまけぬ故容易く作られます。八月頃採つた種子を直に苗床か鉢に下し、土をかけた後、藁を薄くかけて置く。二週間も経ては芽が出ます、それより藁をとりのけ、二三葉の頃に一度他に假植し、秋の中又は春早く花壇に四五寸置き位に本植する、秋植ならば霜除がいり、春植ならばもう一度假植するがよい。又鉢に砂混りの軽き植土を作りて之に挿木し、適度の濕氣を興へて苗を作るもよい。肥料は植付のときに堆肥、灰、油糞などをやり、後に花までに一二度薄き水肥をやれば十分です。

じやかられんりさう(麝香連理草)(スキートビー)

荳科

歐洲では非常に人氣のある草花で、曾て英國皇帝の戴冠式の節などは公花とし

て珍賞せられました、それより一層花の名が高まり、我國でも賞観する者が多くなりました、花は豌豆の様な蝶形花で、佳香を有し、葉腋より花軸を出し其上に二個以上四個位咲く、色は紅、白、紫、覆輪、絞り等種々ある、葉は羽状の複葉で

第三十圖 一ピト一井ス



すが、莖部に一二對の卵圓形の小葉がつくばかりであとは卷鬚になつて他物に卷付く、大きな托葉があります、莖は蔓性で三四尺に伸びます。品種 數多あります、其主なるもの數種を挙げれば次の通り、

紅色
白色

クキン・アレキサンドラ
ドロシー・エツクフォード

ゲイテール・スペンサー
レデー・グリセル・ハミルトン
ヘンリー・エツクフォード
ブラック・ナイト
テンナント・スペンサー
ジョン・イングマン
プリマ・ドンナ
マークイス

白地紅絞
淡紫ぼかし
白に微紅
暗紫色
淡紫色
紅色
微紅
紫紅色

作り方 地植系にしたものは、自然に任かせて籬などに咲かすが、最も風致に富みます、又花壇にて鉢植にも珍重せられます、播種は秋又は春どちらもするが、暖地ならば秋播が宜しいです、すべて秋播きものは翌年春から花が咲き出します、春播きにすれば六七月頃にもならねば花がつかまぜん、さうすれば自然眺める

時期も短いわけです。

種まきは鉢又は目あての地所に直播きもし、又苗床や小鉢にまいて移植してもよい、移植の時は根を特に注意する、又花が見えそめて後に花壇に植ゑこむときは其準備として、兼ねて鉢植にして置いたものでなければなりません。

植土は肥えた有機質の稍多い壤土を好み、風通しよく日當りよき地を好みます。鉢植ゑにてもよく手當をすれば美しい花を咲かすけれど、大輪の勢よき花を咲かするには矢張り十質のよき處の花壇でなければなりません。従つて肥料も十分に、堆肥、過燐酸石灰、糞灰などを多く混じたものを與へる、荳科植物の性として窒素肥料は多量に要しません。花を賞するためにはのみ植ゑた草は、花の後に缺みとりて決して種子を結ばせてはいけません。其代り種採り用のものは成るべく鉢植ゑにして、土質も寧ろ瘦せたる程にし、且つ肥料もあまり多く施さぬ方が宜しいのです。

シネラリア

菊科

アリラネシ 圖四十第



鉢植の温室ものは北風寒き冬の中より笑ひ初め、八重に一重に、カクタス咲、星咲、色は紅、白、紫、藍、覆輪、筋入り等種々の花叢が薫もたわゝに咲き亂れ、卓を飾るには眞にふさはしい美花です、一つの集合花は周圍に舌状花、中央に

筒状花のあること、他の菊科の花と同様です、葉は心臟形であらさき鋸齒があり莖の上部にありて、數多の枝を出し、丈二尺位にも伸びます。

るものを混ぜ、之を篩にかけて平鉢に入れ、種子を下し、土はかけずに目の細かな

作り方 六月頃から九月頃までの中に輕き畑土に堆肥のよく腐りた

如露にて水をかけるか、又は鉢の底を水に浸して水を吸上げしむる、それより古新聞などにて覆ひて、雨のかゝらぬ處に置く、發芽するまでは直接に日光にあてぬ様にして而して暖かに濕氣を保たせる、芽が生じたならば、新聞紙を取のけ風通しをよくし、強き日光を防ぎ、尙苗の小さき中に同じ植土を入れた他の平鉢に移し、そして三四葉を生じた頃に三寸位の鉢に眞土に堆肥のよく腐りたるものを混ぜた肥土に一本づゝ植ゑこみ、此苗が十分に株張りをした後に始めて六寸鉢位に本植して花を咲かす。移植の時に特に注意すべきことは、作業の後二日間は決して日向に置くことなく、根着きを見てそれより日光にあてる、又灌水に氣をつけ、生長の模様を見ては薄き水肥を施す、此草は寒氣に弱り易い故、冬になれば木櫃の中に入れて暖かに育てるか、温室に培養すると花が早く咲きます、畑作りであれば花は四五月頃にならねば咲きません。

スカビオザ

山蘿蔔科

我邦に産する「まつむしさう」といふのが、此一種です、色々の種類があります。花は白、紅、淡紅、暗紅等の色をなし、殆んど球状に花瓣が圓く叢生して八重咲きは、随分奇麗です。花期も長く、五月頃から秋まで咲きつゞきます。葉は羽状に細裂せるもの、又は缺刻葉か、或は葉縁に鋸齒のあるものもある。莖は丈夫で基の方は灌木状になつてゐます。

作り方 秋か春に床に蒔くなり、鉢に蒔くなり、或は花壇等に直播しても宜しい、そして發芽の後に適宜に間引くのです。秋播きにすれば自然花が早く咲きます。多くの肥料も要せぬ、至て栽培し易い草です、又花が終りたる頃、切り去れば葉腋から、新枝が生じて又々花がつきます。

せんいちさう(千日草)

一名、せんいちろう(千日紅)

—— 苧 科 ——

花は白又は紅色で、球の様な頭状花序をなし、葉は長き橢圓形をなし、對生してゐる。莖節太く、一二尺の高さに伸びる。花期の長い花で、花壇に植ゑ、又切花としても觀賞さるる。

作り方 春彼岸の頃、種子を苗床に播き、苗の二三寸にも育つた頃に花壇に移し植ゑます、肥料も水肥位で十分である、栽培の容易な草花です。

つくばねあさがほ(ペチュニア) —— 茄 科 ——

あさがほと名がつけば盛り短き花の様に思はれるが、實際はさうではなく、春の末から秋まで咲きつゞく、但し同じ花が咲いて居るのではありません、花は葉腋よ

り生じ其形は普通種は丸咲あさがほに似て漏斗形であるけれど、八重で牡丹咲の様なものもあります、色も紅、紫、白とりく絞りもあれば、覆輪などもあり、續々咲出します、葉は圓みある心臟形で、縁に凹凸なく、莖に對生し、莖葉に軟き毛が生じて居る、花壇植ゑにもするが、鉢植にもします。

作り方 蕃殖するには種子を蒔いてもよし、挿木をしてもよし、八重咲きは必ず挿木にせねばなりません、然し八重咲きの雄蕊花粉はあるからこれを人工にて單瓣の花の柱頭につけて結ばした種子をまけば、四分の一位は八重花が咲くといひます。

種播は春又は秋の彼岸頃で、鉢にまいてもよし、床蒔きにしてもよい、細き種子ゆゑまく時には注意して押しつけて地面を均らし、淺地を篩にてかけ、細目の如露にて水をかけ、發芽するまでは少しく日陰にして乾燥せぬ様にする、苗が生じ二三枚も葉が生じたならば、他の苗床か鉢に移し、それより後に生長の模様を見て花壇

に植ゑこむか或は少し大きな鉢に本植ゑにする、秋播きの苗は冬にならば霜除けをつくりて保護を與へる。

挿木法は九月頃木框中に細砂を入れて、之に枝を挿しこみ、水を適度にかけて、簾などにて日除けを與へ、根を生じたる後に一本づゝ小鉢に移し、嚴寒の時節は華氏四五十度位の暖き室内に保護する、尤も親木を木框又は温室で育て置き春になりて後に挿木するものもあります。

トレニア

玄參科

異様の形をした花叢が總狀に排列され、青紫色の花冠であるが、下唇の中央に黄色の斑點があり、萼も不規則な形で翼の様な凸起があり、優しき何となく親しみのある、可愛い花で、葉は對生し、形は卵形より心臟形まであり、縁に鋸齒がある、草丈は七八寸の矮性で、下より枝を多く生ずる、丈も多く伸びず、故に

花壇の縁取りなどに最も適する花であります。

作り方 春三四月頃にもなれば、種子を苗床にまき、素と種は甚だ小粒ですから、よく注意して、丁寧に細き土の苗床に播き、土をかけずによく均し、切藁など被せて乾燥せぬ様にします、もし土をかけ過ぎる様な場合には發芽を過ることがある、御注意しなさい、苗が二寸餘にもなれば、花壇に移し植ゑます。苗を移す場合には、植穴に腐りたる堆肥に油粕などを入れ浅く、土をかける。その後生長の勢を見て、適宜に水肥をかけて育てると、久しき間美しき花がさき續き、秋になると莖葉が紫赤色を呈して一層奇麗になります。

ネメジヤ

玄參科

花瓣が上唇下唇に分れた、不整な、剽輕な花で、上唇は四片に裂け、下唇は上唇よりも大きく、花の咽のあたりに鬚がある、總狀の花序をなし、色は白、黄、紅、

構等で可なり種類があります、葉は對生で、至て細長く縁は平で、花期は短さが恨みです。

作り方 種子を春三月頃、床又は鉢にまき、五月頃苗を花壇に植込む、そうすると夏中は咲いて居ります、鉢植によく、又花壇に適します、種々の色に咲き出でますから、とりまけて花壇に植込むと、至て奇麗に見えます。

ネモフィラ

—— 幌菊科 ——

米國渡りの一年草で、多くの品種があります、矮性でよく繁茂する草で、早春から夏にかけて藍、白、紺、種々の斑入りなどの鐘状の花が咲きます、葉は對生もあり互生もあり、羽状に分れ、莖の先又は葉腋に一個づつ、夢、花冠の五分した花をつく、夢には五の齒狀附屬物があり、花冠には十の鱗狀附屬物があります、此花はよく花壇の縁取に用ひられます。

作り方 種子は床蒔、鉢蒔、又は蒔付にして生長につれて適宜に間引くだけでもよい、其季節は早春に咲かするには秋播がよいけれど、早春に播いても差支へはない、此草花は少しく濕氣の多い方を好む様である、水肥を少しくやり、又は灌水をして育てる、作り方は至て容易い、優しき丈短きもの故、花壇の縁取などにも用ひられる。

はうせんくわ(鳳仙花)

—— 鳳仙花科 ——

赤、白、紫、絞り等の單瓣若くは重瓣の不整な變な形の優しい花が、葉腋から葉かくれに咲出す、葉は細長き形で、草は一二尺位に伸び、左程立派な草花ではないけれど、何處にでも植ゑられる極めて普通のものです。

作り方 三四月頃に床に種子を下し、二三寸に育ちたる頃、花壇などに移す、至極強壯な草ですから、一二度も水肥をかけるるとよく育ち、大きく美しい花が、

長く咲いて居ります、果實は莢状で、熟すれば軽く觸れても直に裂けて飛びちります。

はなびしさり(花菱草)

罌粟科

黄金色の一二寸に充たぬ花ながら、葉ぶり花形鉢植としていちらしい草です、アメリカ渡りの一二年草で、花はけしと同様に二萼四瓣、葉は細く裂けて互生し、莖

と同様に緑色に少しく白色を帯てゐます。

草丈はやつと一二尺、黄花が普通ですけれど、赤、白の種類もあり、又重瓣もあります果實は莢形に長く三四寸にも生長し、熟すれば裂けて小さな種子を散じます。

作り方 移植が六ヶ敷ゆる始めより植付け

うさしびなは 圖五十第



にするが手軽です、尤も根の土を其儘落さぬ様にして苗の小さな中に丁寧にするれば移植が出来ぬ譯でもありません。播種の季節は春、秋いづれでも差支へはありません、三四月に播けば夏秋に咲き、九、十月頃まけば春夏に咲き出づるのです、一本づつ鉢植として仕立てると卓上を飾るに結構です、此秋播鉢植を温室育てにすれば早春に咲出して珍らしく眺められます、移植こそ少し六ヶ敷ですけれど、草の性は別に弱くもありませんから、適宜に水を灌ぎて乾燥を防ぎ、花になるまでの間に一二回も薄き水肥をかければ美しき大花がさします。

ひえんさう(飛燕草)

一名、ちどりさう(千鳥草)

毛茛科

尾を具へた異様の花は飛ぶ燕にも似て見えます、白、赤、青等の色に咲き、莖は二尺許りにのび、葉は互生して、く糸の様に裂ける。此變種に丈低く八重咲きの

うさんえひ 圖六十第



ものもあります。

六四

作り方 春、秋の彼岸頃に苗床に種子を播き、苗が二三寸に伸びたとき鉢に移し、又は花壇に植付ます。秋播きものは翌年の春よ

り夏に亘りて咲き、春播きものは夏より秋にかけて咲きます。此花も作り易く水肥少しやればよく育ちて、美しき花がさします。

ひまはり(向日葵)

菊科

大きな黄金色若くは白金色の花が、七八尺もある高さ太き莖の上に傲然と光彩を放つ、葉は卵形で縁に鋸齒がある。花期は夏より秋に亘る。

作り方 春三月末種子を苗床にまき、苗が二三寸に伸びるを待て花壇に植ゑつける。堆肥、油粕、灰などを基肥に入れて、其上に植ゑ、尙成長期中に水肥を施せば尺にも達する巨花がさき出す。

ひやくにちさう(百日草)

菊科

あまり上品な花ではないが、つくり易くもあり、切花、鉢植、花壇色々にして賞せられ、至て普通です。花に單瓣と重瓣とあり、夏の初めより秋の末までも咲き続け、紅、白、黄、紫様々の色があります。枝が葉腋より生じて、其頂に一個づゝ頭状花がさしますから、花が終りかけたなら、其枝を切ると、切口の葉腋より新枝を生じて、又花が咲きます、それ故に草丈も左程徒伸びせずに、大きな美花が咲き出します。葉は心臟形で對生し、莖には毛が生じ、割合に太く丈夫で二三尺に伸びよく繁ります。

六五

作り方 種子を春早く苗床に播き、苗の少しく育ちたる頃に鉢や花壇に移し植ゑる、尤も遅く植ゑても差支へはありませぬ、唯花が遅く咲き出すだけです、又成るべく早く咲かせんとするには、木框内に播種せねばなりません。肥料には油粕の水肥などを施します、又移植のときに堆肥に油粕などを混じて與へるがよいです、然し肥料をやり過ると、却て莖葉の徒長を來してヒヨロになることがあります、加減せねばなりません。

まつばぼたん

馬齒莧科

玄關前や、庭の飛石の間などを、八重一重、赤、白、黄、淡紅、樺、絞等とりくに、此愛らしい小さき花で彩るは、可なり奇麗です、夏期長く夏より秋に亘り晴天に開きて雨天に凋み、丈僅に三四寸に過ぎぬ故、花壇の縁取りにもよい。葉は名の通り細く圓く針状で、そして肉質である、莖の付け根の部に毛がある。

作り方 四五月頃花園に播き付け、芽の生じた後に適宜に間引く、種子は至つて小さい故、土は浅くかける、間引くときは莖の色によりて、花の色合を察し、苗の配置をするがよい、性質の至極強壯なる草であるから、殆んど肥料もいらぬ、又小粒にて種子の採收が困難なる故に、作つた園の上層の土をかき集めて置き、翌春此土を適宜に花園にふりまけば、苗が生ずる。又一度栽培すると、こぼれ種子より自然に苗が生ずる故、之によりて植ゑこむも輕便な方法である。

まんじゆぎく(萬壽菊)

一名、せんじゆぎく(千壽菊)

菊科

鮮かな黄色か樺色の大きな頭状花が、一輪づゝ枝の頂に咲き、花壇を賑はす一の草です、英名マリゴールドの語が普通に知られてゐます。單瓣と重瓣とあり、花期長く初夏より秋の末まで断えず咲きつゞく、葉は羽状の複葉で、細長さ小葉を

第 七 十 圖 主 人 幼 ぎ ぐ



六八

有し、縁に鋸齒がある、但し
莖葉に一種の臭氣があるのと
草丈三尺にもなりて高過ぎ
るのが、此草の缺點です。

堆肥に灰や油粕などを加へて、一握り位づゝ與へ、且つ其後水肥位を施しま
す。しかし其量を過すと、徒伸びをしますから氣を付けなさい、此花は畑作りにし
て切花として賣り出します。

むぎなてしこ

俗名、うめなでしこ

石竹科

花も優しければ葉も優しく、二尺位に生長する一年草です、花は花梗が長く、
花瓣は五つにされ、桃色で形稍梅の花に似てゐる、萼は筒状で萼片が長い。
作り方 春早く苗床に播き、二三寸にのびた頃花壇に移す、春より夏にかけて花
をつけます、栽培の至極容易な草花で、往々畑作りにし切花として用ひます。

むぎわらさく

菊科

一名、かひざいく(貝細工)

藁程細工か貝細工の様に、花の外部は乾燥して堅く、手を觸れるとバラ／＼と音
がして、生か枯れたのか分らぬ程。花の色は赤、白、黄、樺等様々で、夏の初めよ
り秋まで咲き續く、葉は長楕圓で互生、草は二三尺の高さになる。

六九

第 十 八 圖 むしとりのきむ



山、栽培は至て容易く、唯秋播きの時は霜除けを與へる。

むしとりなてしこ

石竹科

一名、こまちごくら(小町櫻)

草は二尺位に伸び、節々より粘液を出します。之に羽蟲などが粘りついて死にます、花は紅色が多く稀に白があります、莖は數多分枝し其先きに小さな花が多く

七〇

此花は日光を好み、よく照らす時によく開きます。

作り方 春秋の兩彼岸の頃に種子を苗床にまき、苗が二三寸になるを待て、花壇に移し植ゑる。肥料は水肥位で澤

花壇等にありては勿論播種して育てねばなりません。



第 十 九 圖 むしとりなてしこ

咲く、葉は互生し形細長く、花時永く花壇に密植すると随分に美しいものです。作り方 至て強健の草で作り方甚だ容易です。春秋何れに種子を下してもよい、

春夏に咲かするためには、秋彼岸頃に播き、夏より秋に眺めるためには春三四月播種すればよいのです、そして一旦栽培すると其後は種子が獨でにこぼれ落ちて自生する様になります。然し規律正しき

やくるまぎく

菊科

紫、藍、紅、白様々色々に咲き出で、花冠はすべて筒状で、周圍のものが稍々

七一

大きい集合花で、草丈二尺位になる、もと歐洲種の一二年草です、葉は互生し細長く尖り、莖と共に綿の様な毛がはへて居ります。

作り方 春播秋播兩種ありますけれど、秋彼岸頃にまくがよい、通例苗床にまき、二三寸に伸びるを待て花壇に植付ける、生長につれて二三次水肥をやる、特に油粕が適する様です、性強くよく寒さに堪え、至て作り易い。此花は廣く畑作りにして切花として需用が多くあります。

やぐるまてんにんぎく(矢車天人菊)——菊科——

周圍に黄金色の、先さのみ五つに分れた筒状花をつけ、中心花は密接して咲く、花期甚だ永く春の末より秋の末まで咲き續く。葉は細長く、縁に淺き缺刻か又は鋸齒がある、莖は短き毛を生じ草丈は二尺位になる。

作り方 春三四月頃に、種子を苗床に下し、苗か少しく育つた後に花壇に移す。

第二十二圖 やぐるまてんにんぎく



栽培至て容易く、油粕など混じた水肥の薄きものを與ふれば、よく繁りて大きな花がさく、切花として賞でられ、又鉢植や花壇に植ゑて奇麗です。

ゆふがほ(夕顔)

一名、やくわいさう(夜會草)

——薯蕷科——

夏の夕暮の夕顔棚の下涼みを、昔から風流なものとしてあるが、それはふらりぶ

らりと下る瓜の夕顔、これとそれとは大に違ふ、花が夕暮に開くからの名であつて
舶來の花である、洋名をムーン・フラワーといふ月の花といふ意味である、莖が殆
んど尺にもならうといふ雪の様に純白な白花が、朝顔の様な否薯蕷の様な蔓の上
に夕方かけて笑ひ出す。花冠の喇叭状の開きが大きいと同時に花筒の部もすてきに
長く、花が一夜で萎れる、葉は薯蕷に似て心臟形をなし、莖太き蔓となり二丈以上
にのびる、眞夏から咲き暑熱を好む花で、寒い處は出來が悪い。

作り方 種子はあさがほに似た大粒のものであるが、涼風が吹く様になれば、兎
角結實し兼ねる、されど早く實を結ばせると草が弱つて花が早く小さくなるから、
よく兩方の處を考へ合せて、適宜のときに保護を與へて結ばせる、特に寒さの早く
來る地方では往々結實をあやまる。種蒔はあさがほと同様に五月初旬に成るべく
白き種子を播く、種子の皮が厚く、水を吸ふ力が鈍いから、一二月間水に漬け、皮
を少しく剝いて床地又は小鉢に播く。

苗が生じ甲析が開いたならば、最早移植してよい、若し本葉の二三葉も生じた後
であると活着が悪しく、開花の期も後れる、鉢植の場合には最初は四寸位の鉢に假植
し、その後八寸以上の大鉢に植える、蔓の生長を見て行燈形などの支柱を與へて卷
つかする、蔓は一本其儘に育てると、心を摘んで枝をさへせ其中強壯なる一本を
仕立つると二法ある。

肥料は蕾の見え初むる頃まではやらぬがよい、蕾が出たならば一週間に一度位づ
つ、下肥の薄めたものや、油粕をやり、灌水は午前乾かして、午後十分にや
ると蕾が勢よく伸びて立派な花が咲く。

地植は種子を採るために行はる、これは桓根作りや、立木などに纏はせて、十分
に伸ばし勢力を付ける様に育てる、この仕立方の花を見るも見事なものである。

るからさう(蔦蘿)

— 旋花科 —

一年草の蔓草で、あさがほに似た漏斗状の縁だけが五片に裂けた、小さいけれど燃ゆる様に赤い花が葉腋から軸の上二三輪づゝ咲く。葉は羽状に裂けて糸の様に細

作り方 三月末頃床に種子をまき、苗が二三寸に育つを待て花壇に移し植ゑるか、又は籬の側に植ゑて、巻付かする、至極強壯で、肥料などは施さぬも宜しい。

ロベリア

——桔梗科——

花は總狀に並び、形は小さいが、上唇二片に分れて小さく、下唇は三片に分れ大きく、チョット不整な花です、花瓣の色は藍色が普通だが、白もあれば紫や紅色もあり、なか／＼美しいです、葉は細長くて縁に鋸齒があり、草丈短く、春の末より夏かけて咲き花壇の周りなどに植ゑて適當です。

作り方 春の彼岸頃、種子を苗床か又鉢にまき、苗が少しく伸びるを待て、他の

さぐなれすわ 圖一廿第



鉢或は花壇に植ゑる、種子は極めて小さき故に、播いたとき土をかけずに置く方が宜しい。乾燥せぬ様に適度灌水して育てると、頗る美事な花が咲きます。

わすれなぐさ(勿忘草)

——紫草科——

やさしみのある此名はフオアゲット、ミー、ナットといふ英名の意味をとつてつけたもので、實は花よりも名の方がよつほど美しいのです。一二年草か又は多年草で色々の種類があります。春夏の季節に藍、白、薄紅などの小さな花が長さ莖の上に聚繖花状にさき、莖の先さがまだ蕾の部分が圓く巻きこんで居ます。萼は稍筒状で花

冠は五瓣で盆状か漏斗状です、種子は黒く一花に四個づゝつきます。葉は細長き楕圓形で粗く毛が生へ、根に近き葉には葉柄があれど、莖につけるものは無柄です、草の丈は小さき種類は五六寸位、大きな種類は二尺位までのびます。花壇に植ゑる種類は皆洋種です。

品種の主なるもの

い、ミオンチス、バルストリス この種が眞の勿忘草で、花は空色、一二尺に育つ二年草か多年草の英國原産です。

ろ、ミオンチス、アルペストリス この種は普通に培養せらるゝもので、花は藍色、夕方になると香氣があり、一尺足らずの小草の越年草で、瑞西原産です。

作り方 バルストリス種は少しく日蔭の濕氣ある地を好みますが、アルペストリス種は乾地がよい様です、土質にはあまり好き嫌がありません、どちらも花壇を飾る小花ですが、バルストリス種は鉢植にして窓側などに置きてよいものですが、ア

ルペストリス種は庭の池の測などに植ゑるが風致もあり又性質にも適します。

春、苗床に種子を播けば容易く芽を生じます、又秋播きにしても差支ありませんが、其場合には冬は霜除けをせねばなりません、鉢植にしたものは木框に入れて寒氣を凌かしめると春になりて笑ひ出します、地植ゑのものは一旦播けば種子がおのづとこぼれ春になれば萌え出でますから、それを直に苗として植ゑつけられます、又多年生の種類ならば春、根分けをして殖やし、或は夏になりて日蔭の地に挿木してもよく根を生じます。生長中は適度に水をかけ、水肥等を施せばよく育ちます。

五、宿根草類

アルメリア

磯松科

紅色の小花のかたまりが、春より秋まで咲きつゞく、細き松葉の如き葉が繁つて草丈數寸にすぎぬ、花壇の縁取りに最も適するが、小鉢に植ゑたものも愛らしいも

アリメリア 圖二廿第



のである。

作り方 至つて強壯な草で、冬も其儘越年するけれど、簡単な霜除けを與へれば、一層良い、根分けをするには秋がよく、どしどし殖える草である、春、花になる頃、薄き水肥を與へれば、生育がよいけれど、あながち肥料をやらんでも繁茂する草である。

カーネーション

—石竹科—

麝香撫子といふ名がつけられた、小さな牡丹、又は八重の石竹といった様な形で然かも香氣を有する美しい花である。近來だん／＼栽培する者が多くなつた、鉢に植えても、花壇に植えても一方の旗頭である。單瓣は見ばひもせぬが重瓣は二寸以

ンヨシーネーカ 圖三廿第



に咲かすることも出来る。

種類 多數ある、其別け方に色々あつて、英國式の色にての別け方はセルフ、カーネーション 一花一色 フレック、カーネーション 一花に一種の他色を混ざるもの ピザール、カーネーション 一花に二三種の他色を混ざるもの

上の大きさになり、色も紅、紫、白、黄、覆輪、絞り等様々である。葉は細長く白味を帯び、草丈は一尺位に伸び、下部の方は木形にもなる、然し花が割合に肥大して倒れ易いから一々小さき支柱を與へねばならぬ。露地栽培の場合は春から夏へかけて咲が普通であるけれど、温室培養にて冬の間

ビコーチー、カーネーション
佛國式は形と色とで別ける。

花冠の縁は他色のもの、即ち覆輪を有するもの

八二

グレナーデン、カーネーション

單色、一重か八重の中輪、香強く、花瓣の縁

に鋸齒のあるもの

フラマンド、カーネーション

二色以上、一重か八重の大輪、花瓣に鋸齒がな

す。

ファンシー、カーネーション

薄色地に濃色の彩色あるもの

尙近來次の様な分類が行はれる。

ボーダー、カーネーション

露地栽培に適する強壯な種類で、春の末から初夏

にかけて咲き、丈高からず、支柱なくも倒れぬ、中輪の一季咲きである。

マルメイズン

純白が原種だか今は種々の色がある、寒さに弱く、莖は真直に

伸びて花つき良く、四五月頃咲く一季咲き、よく育つと五寸以上の大輪をつける。

トリー、カーネーション 四季咲きで、發育壯健で木立になる。秋から冬かけ
て笑ひ、嚴寒中の花の王とも見らるゝ。

作り方 之を殖すには種子よりすると、挿木と取木と三法ある、新らしき變種を

作り出さうとするときは種子を播くもよいが、これは兎角劣等のものに退歩する傾

きが多いから、熱心な研究家がやる外は、あまり此法を行ふ人はない、もし種子を

播かんとするならば、平鉢か苗床に、春又は秋播き、春播きならば四五葉生じた頃

に、鉢に一本づゝ植ゑるか、又は花壇に植ゑつける、秋に播いた苗ならば、苗床に

假植し、霜除を與へ、春になりて後、目的の處に本植ゑする。

挿木は夏、開花の後がよいが、春秋でもよく又温室内ならば一月末頃に行ふ、

先づ平鉢に細土と砂とを等分に混ぜ、之に二三節の枝を挿して温室又は温床で日の

直射せぬ處にあき、濕氣を適度に與へて根の生ずるを待ちて、他に移し植ゑる、取

木も挿木に準じ、節より根の生じた後に切り放して本植ゑする。

八三

此草を本植するときは、少し重き土質の肥土を用ひ、生長期中、花の開くまでに二三回水肥を興へる、草の伸びるにつれて心を摘みて枝を多く出さすると、花の数は多くなるけれども、花多ければ形の小さくなるは、自然の理ゆゑ、あまり多くの枝をつくらぬがよい。此花は花壇にもよいが、鉢植にして床に置いて美しい。

き く (菊)

— 菊 科 —

別名 形見草、千代見草等

陶淵明が東籬の下に植ゑて、自然に咲き亂れた、其隱逸なる風情を賞でたといふ昔は知らないが、恐らく栽培法も研究したでもなく、品種とても多くなかつたに相違ない。これが支那より我國に渡つてから、非常に發展をして、今では千種以上といふ多くの品種が作られ、尙年毎に増すばかりである、扱他の草花類は皆影をひそめて了うといふ秋の末に、花の殿りは拙者であるといふ、豪勢な意氣を霜の朝

第廿四圖 菊の品種



に示しながら、其の隠逸な気分はさらりと棄て、一株に千輪といふ慾の深い咲き方や、一莖一輪の尺に餘る壯大な形を錦の色、黄金の色、白金の色、ダイヤの色、ルビーの色と、春の牡丹の富貴の相を奪ひ取つて花壇に誇つて居ることは皆様の御覽の通りである。

種類 夏菊、秋菊、寒菊といふのは咲く季節による分け方、大輪又大菊、中輪又中菊、小輪又小菊と稱するのは花の形からの分け方であるが、最も栽培、觀賞に供せらるゝ秋菊を主として、花の咲き方によりての分け方をいへば次の通り、これが最も普通の方法である。

い、大菊 八重咲の菊で一尺以上にもなり、花冠が重りあつて厚く大きなる、然し狂咲にはならぬ。花冠は多くは管状をなし、太管、間管、細管、針管など、其太さによつて名づけられる。花は心の見えぬ様に厚く咲くのによしとする、草丈は伸びる性がある。

ろ、一文字菊 大菊ではあるが、花冠は周囲の舌状のものだけよく發育する、つまり一重咲きと稱するのである。大なる花冠の数は十五六枚より二十四五枚であるが、多少人工を加へて十六枚のものとし、皇室の御紋に擬らへて、御紋章菊といふ。舌状の花冠は幅廣く、先き圓く、平に廣く伸び、屈曲のなきをよしとする、徑一尺に餘り瓣が垂れるが故に輪臺をつけるが普通である。葉も従つて大きく五寸以上にもなる。莖も高く伸び、葉數は十五六枚位である。

は、中菊 大きさが大菊と小菊との中間であるから中菊といふが、この種類が最も廣く栽培せられ菊の主位となつてゐる正菊といふので、狂咲きをして、色々に花弁が藝當を演ずるのである。一花の中に最外部に管瓣、其次に匙瓣、中心部に平瓣とを具へて、規則正しく變化し、瓣の中の心を保つ間が十日間、眞を顯はして十分に開く間が十日間、其後瓣が其花の特性につれてそれ／＼狂ひ出して全く心を包むで球の様に鞠の様に圓くなるまでの間が十日間、都合三十日に亘りて、藝を見せて

ゐるのが、最も良いのだといふ専門家の言である。花瓣の狂ひあけた時の形によつて種々の名がつけられてある。

丸抱 一二瓣づゝ心に向て圓く重なり合ふもの。

追抱 一枚の瓣が斜に倒れて狂ひ初めると、それにつれて次々と、後を追つて重なり、心を圓く包むもの。

亂抱 四方から、心に向つて勝手に狂ひ、亂雑に心を包むもの。

棲折抱 瓣の中頃が一樣に折れ曲つて正しく心を包むもの。

自然抱 全部の瓣が咲き初めより、心を包むで圓くなるもの。

管抱 管瓣のみか、又は管瓣と匙瓣とだけ自由に咲き出すもの。

露心抱 平瓣が動いて色々に狂ふけれど、花瓣が勢力強く瓣端が巻きこみて、花の心が隠れぬもの。

に、嵯峨菊 花瓣は細長く三四寸にも伸び、数は五十以上にもなる、最初は亂咲

であるが、次第に捻れて立上り、全部が立切つた所が、最も見事な所で、後其儘に凋れて了う。葉は小さく、莖は高く伸びる、京都で多く作られた。

ほ、肥後菊 一文字菊によく似てゐる、唯此種は花瓣の幅が狭く、瓣と瓣との間が透いてゐる。

へ、伊勢菊 極細の瓣が房々と伸び、立上らずに四方に垂れ下る優美な花で嵯峨菊に似てゐる。

と、小菊 花も小さく、葉も小さく、草丈も低い、花の形によりて七々子菊、菊、貝菊などゝとなへ、これも雅致のあるものである。

ち、夏菊 これは夏期に咲くが故に名づけられたもので、種類も少なく、雅致にも乏しい、唯花の早いだけが賞せらるゝ所以である。

り、寒菊 この菊は霜の降りる頃に咲く小菊で、これも風韻に乏しく、たいした花ではないけれど、外に花もなくなつた頃であるから珍らしく眺められるに過ぎな

い。

此外に食用にする料理菊、四季咲きの不斷菊などもある。

以上は品種の大別であるが、専門家はそれ／＼變種に色々の雅名を付けてゐる、其内の數種を擧ぐれば、

大菊即ち重瓣咲には

夜光の玉 黄、太管、萬重毬咲、最大輪

唐織錦 外金内緋紅、管走、千重、抱咲、最大輪

敷島 金樺、紅筋入、匙瓣、千重、抱咲、大輪

銀世界 雪白抱 千重、毬咲、大輪

滿月 純白、千重、抱咲、大々輪

不老金 純黄、平匙、交、千重、抱咲、大輪

一文字咲には

千尋の波 純白大幅、十七八瓣、大々輪

譽 純黄、大幅、十六七瓣、大々輪

錦の譽 外金内朱紅、大幅、十六七瓣、大々輪

西眉の舞 紅大幅大輪

狂咲中菊には

男山 純白細瓣

玉樹後庭花 雪白狂咲大輪

古今の色 濃紅狂咲

筆染川 濃紫紅、狂咲、大輪

使丁の箒 外朱樺内緋紅、狂咲

御國の譽 純白、狂咲

福包 濃桃色、絢狂咲大輪

黄金の里 濃黄千重狂咲

其他各品種に數へされぬ程の變種があるが、それらは何れも略して置く。

作り方 栽培に最も骨の折れるのは秋菊である、故に作り方は、此種を標準として書く。

殖し方 普通は根分けであるが、挿木、接木もなし、又新種を得やうとする専門栽培家は種子を播いて珍種を作り出す。

根分 とは 即 株分けて、根元から數多の芽を生ずる故、之を一本づゝに分けて植ゑる、季節は十一月末頃より十二月にかけてするもあり、春三四月頃にするもある。どちらがよいといふ事は品種と其人々の説とによりて異同がある様ではあるけれど、秋の中に根分をすれば、春までには根が出来て強壯なる苗となる。但し普通の者は多く春になつて後にする。さて根分けをする場合には幅三四尺長さ隨意の苗床を日當りのよき暖かな場所に作る、床土はよく碎きて地均をし、後薄き水肥を

まき、尙其上に細土を置き、畦を造つて三寸位の隔りにて苗一本づゝを植ゑる。苗は伸び過ぎたるものをば捨て、成るべく根の多くて強壯なるものを選び、尙其上に軽く霜除けを與へ、乾燥せぬ様に手當てをする。冬の中に根分をした苗は、翌春彼岸頃に外の苗床に又移す、此時には生育のよき苗を選び分け、十分に距りを與へる、若し伸び過ぎたと思ふ苗があらば、莖も根もさりつめ勢力を削いて植ゑるがよい。それより五月になりて始めて本植ゑにとりかゝる。

挿木 これは六月初め頃で、そろく梅雨季節といふ時がよい、莖を二三寸の長さに切りて砂か又は軟き輕き土に半以上を挿し込み、細目の如露にて乾かぬ様に水をかけ、數日間は日光を避けて保護する、特に注意する者は木框の中に挿して大事に育てる、上手な作り手になると、挿木でなく挿葉をするものもある、珍種である一枚の葉でも容易に呉れぬのは、こんな秘傳があるからである。葉を挿すときは挿木と同様ではあるが、唯葉の先さをさりつめた水の蒸發力を減ずる必要があ

る。

接木 菊は容易に接木も出来る、其法を割り接といふ、砧木の菊の莖を真中より割り、接穂となすべき、菊の莖を兩側より斜に切り殺し、砧木の割れ口に挿し込み、接ぎ口を濕れ紙にて巻き、其上を蘭などにて縛り置くのであるが、二週間も過れば蘭を除いてよい、割合に接ぎ易きものである。

種蒔 これは前にもいつた通り、新種を作るための冒險的の仕事である、何故かといへば、種子を蒔いて出来たものは、大概は原種よりも劣等なものであるが千に一つ、珍貴なものが出来る事のあるのを僥倖するのである、軽き水排きよき土にて苗床を作り、三四月頃之に蒔きつけ、極薄く土をかけ、雨にうたれぬ様に硝子や油障子にて保護し尙霜除けをも與へて保護すれば、二三週間位にて發芽する、それよりそろ／＼日光や風にあて、強壯にし、五六葉になりたる後に移植する。

土造らへ 土の造らへ方は、是又専門家の色々苦心する處で、經驗によりて様々

にするが、兎に角、腐植質を十分含み、水排き良き土壤でなければならぬ。

此の末にごみ土の良く腐つたものを篩にかけて石や瓦等を去り、少し許り砂をよく混ぜて積み置き、冬の中に下肥、米汁等を數回そそぎ、彼岸頃に切り崩して篩にかける、但し雨にかゝりて養分の流失せぬ様に注意する。又一法は畑土と厩肥とを混じ置き、其上に幾回も下肥、米汁などをかけ、よく腐らして切りかへし篩にかける。

肥料 土五六升に對し油粕と糠とを二三升の割にまぜ、一二ヶ月も雨のかゝらぬ處にねかし置き、よく／＼腐熟したものを、植付けのときに、植穴に三四合位づゝ入れ、其上過燐酸石灰四五勺を加へてよくまぜて後、前に述べた植土を入れて苗を植ゑつける、其後は土用に二三回位油粕の薄き水肥をやり、又九月にありて後花肥と稱して最後の速効肥料を施す。智利硝石、硫酸アンモニア、硫酸加里なども補肥によい、但し薄き水肥にせぬと肥しまけをするから氣をつける。又ペ粕も良き肥

料で、油粕など、共に用ひてよい。

手入 中菊の苗を本植多したならば、本葉四枚位を残して心を摘み、其後葉腋より新芽が出たらば、其枝三枚位の葉になるを待ちて又心を止め、更に枝をさして、葉三枚位を度として、又々心を止めて枝を殖し、望む丈の數に達せしむる。六尺位にも伸びさせる目的のものならば土用前に心止めをやめてよいが、四五尺位にせんとするものならば、土用迄も心つみをする必要がある、いよく枝の數が極まつた後は、葉腋より出づる芽を悉くつみとらねばならぬのである。但し夏の中は屢々菊虎といふ蟲のために心を枯らさるゝことがある、八月頃までは豫備の腋芽を残して置く必要があらう。さて蓄が見え出したならば上より二番目の蓄を残して、其外は皆つみとり一枝に一輪づゝ咲かす様に仕立てる、普通は一株より數本多くて二十餘枝に一輪づゝとする、然し千輪咲と稱して一株の枝を數百本に仕立てるものもあるが、これは早く肥大した苗を養成し、冬の中も暖にして、彼岸迄には心

をつみ、五六枚を生ずる様株造らへに大に努力を要し十分に肥料を與へて育てる。

大菊の仕立方は最初四枚許りの葉を残して心をつみ、残れる一つの芽が數寸に伸びるを待ち、又も四枚の葉を残して心をつみ、それより後に生じた腋芽の中で最も丈夫な一個だけを育て、其後は決して腋芽を生長させることなく、一株一莖にし、枝頭に一輪の大なる花を咲かすのである。此仕立方は株分のときのやり方で、挿木ならば、手数は省けるものである。

花壇植ゑ 定植すべき花壇は、其人の好みによりて大小形状を異にするも差支へはない事だが、普通は間口三間奥行一間半位にして、三列二十株とする、即ち前列後列が七株づゝ、中列が六株とする。植ゑつける位置は深さ一尺五六寸、徑一尺二三寸の穴を掘り、底には粗土を入れて水排きをよくし、其上に前に述べた用意して置いた肥土を入れ基肥をまぜ、一穴に豫備として苗を三本づゝ植ゑつける、尙注意すべき事は苗を植ゑるときに心を摘みとることである。

支柱 菊の莖が漸々生長するに従て、風のためなどに倒れ易く、一旦倒れると直に悪しき癖がついて最早直す事が出来ぬ、それ故に早く支柱を立て、枝を結びつけるのである、一輪咲ならば僅に一本にてよいが、中菊では數十本千輪咲では數百本を要する、細竹を黒や緑に塗りて用うる人もある。

花臺 一文字咲の大輪物では、幅廣の花弁が垂下るが故に、針金や厚紙などにて花臺を造り、此上に瓣を載せて置く。

鉢植 花壇植に比べると幾分花の劣る事は免れぬけれど、莖を短くし葉を根元より持たすなどの趣はある。まづ素焼の徑一尺鉢に十本立位より十四五本立迄にするが、徑一尺五寸鉢に二十四五本位までは出来る。水排きのよき花壇用の土に向腐葉土などを混ぜた土を用ひ、粕、油粕などを基肥に入れるがよい。

苗は五六葉の時苗床から一旦他床へ移し、心をつみて二つの芽を育て、五月末より六月初めまでに鉢に上げる、芽が伸びて三四葉の頃につみとり、二葉を残して繰

返し摘みとり、花壇植よりも少しく遅くして葉に注意するのである、支柱は四方から眺められる様に中央を高くするがよい、結びつけるとき、花壇に施す様に枝を勝手に曲げてはならぬ、成るべく枝の頂を揃へる様にするが上手な作り方といふ事も忘れてはならぬ、補肥は毎日薄きものを施し、水も適度に與へる、雨にうたれ

ると下葉が枯れ上り、強き日光も害ある故に共に注意を要する。
被覆 花の咲く頃にならば、花壇でも鉢植でも被覆物を與へねばならぬ、左右と後を篋簀にて圍ひ、上の屋根には油紙障子などをかけて強き日光や雨露若くは霜を防げば、花は長く美しき姿を見せてゐる。

キユフエア

千屈菜科

澤山の種類がある多年生の草又は灌木で、普通に作らるゝ種類は一尺位の莖丈で、葉は細長く、花は花瓣がなく、萼ばかりで、此萼が長さ筒状で美しき紅色を

なし先きが六つに裂ける、小さい花だが、夏から秋かけて續々愛らしく咲き續く。

作り方 挿木にて蕃殖する、新枝を二三寸に切り、平鉢か木框内に砂をまぜた挿床を作りて挿し、適度の濕氣を興へ、日光の直射を避けて育てれば容易に根を生ずる、それを鉢などに移して賞する、これは花壇の縁取りなどにも用うるが、寒さには弱いから、冬の中は温室に入れ又は木框内に入れ防寒してやる必要がある、栽培の至つて容易なる草花である。

きんぎよさう(金魚草)

——玄參科——

總狀花序に連りて假面の様な異形な此科特有な花がさく、紅、黄、白種々の色を裝うて春の末から秋までも咲きつゞく、葉は對生し形は細長さか、又は長き橢圓形で、縁に凹凸がない、草丈は二尺位になる。

作り方 苗床を用意して秋又は春の彼岸頃に種子を播くも良いが、一旦作つた後

は初夏の頃挿木して殖やすことも容易い、此草は至て強壯で、關東地方以南では冬になりても霜除けの必要もなく、よく冬を越す、水肥を生長の模様を見て二三回も與へれば十分である。春播きで育てたものは六七月頃より咲き出づるが、秋播きにして置くと、翌春四五月頃から咲出す、花期が永いから特に花壇を賑はす草である。

くさけふちくたう(草莢竹桃)

俗名、おいらんさう(花魁草)

——花荵科——

美しい花が莖の頂に簇生し、鉢植もよければ、花壇にも適し、廣く作られてゐます。花は紅か白で花冠が五瓣に分れ、基部は筒状をなし、葉は略卵形で對生、莖は三尺位に伸び、夏秋の候に咲く、もと北米産です、ドラモンド・フロックスといふのも此一種です。

第廿五圖

くさけふちくたう



作り方 根分か又は挿木にてふやし
ます。春早く又は秋落葉の後が株を分
けるによく、六七月頃は挿木の適期で
す。稍濕氣ある肥土を好み、且つ二三
年毎に株を分けて培養すると大きな美
しき花をつけます。

一〇二

けまんざう(華鬘草)

一名、けまんぼたん、ふぢぼたん

罌粟科

草の姿が牡丹に似た、然し富貴とまではゆきましますまいが、ちよつとおつなやさし
みのある花である、形も不整な奇形をなして長き花莖に總狀花序につきて垂れ下る
花瓣四枚、二對になり、外側の方は紫赤色で基の部がふくれ、上の方に細く、外側

の二枚は白で先きがくつつき、雄蕊は六本ありて、三本づゝ東になつてついでゐる、
四月頃に花咲く、葉は羽狀に細く裂け、長き葉柄を有してゐる。
作り方 肥えたる砂質壤土がよい、株分けをするのは秋か又は春早くする、其仕
方は簡單で根莖を掘り出し適宜に分けて鉢植ゑ又は花壇植ゑにするまで、ある。

さくらざう(櫻草)

櫻草科

雲雀鳴く野の緑の中に交りて、桃色の花叢が毛氈を敷つめた様に又は友染の染模
様の様に色彩らるゝ野生の櫻草は可なり郊外散步の眺めになる、然し野生の花は一
重で賞する價値に乏しいが、栽培種には極めて多數の變種が出来てゐて、三百種以上
もあつて専門に之を作る人もある、本來は長き楕圓形の凸凹多く、縁に鋸齒ある葉
であるが、だんく變り物が出来、花は更に多くの變化を現はし、大輪、八重、紅、
紫、白、絞等咲き方に彩色に珍奇なるものが澤山にある、良種として名高き花銘は

一〇三

一天四海 白、大輪、
 玉珊瑚 紅、玉咲、中輪
 香爐峯 白、狂咲、最大輪
 西王母 桃色、内曙白、狂咲、最大輪
 小夜衣 白地藤紫筋入、抱咲、大輪
 緋の袴 極紅、抱、玉咲、中輪
 蝦夷錦 白、裏紅、切咲、大輪
 五大洲 薄桃色、裏白、大輪
 思の儘 裏薄藤、内白、大輪
 千代鶴 白、狂咲、極大輪

作り方 種播 新らしき變り物を造り出さうとするには種子を播いて探らねばならぬ。然し此種子より仕立つることは中々手數がかかる。種子は六月中頃より注意

う さ ら く さ 圖六廿第



して熟するを待ちて採取し、細い砂などを混じて、あまり乾きさらぬ様に貯へ置き翌年春の彼岸頃に肥料氣のない瘦地の床をつくり、種子をまき僅に土を篩ひかけ、濕氣を與へて發芽をまつ、苗の生長を見計らひて、他に二寸位の距りにて移し植ゑる、九月頃になれば葉が枯れる故此時に土を寄せ藁をかけて置く。翌春には花咲く者もあれど、まづ三年目に大抵花咲くものである。されど優品は四年目でなければ現はれぬ、とに角種子より仕立るは優品を僥倖するといふべき作り方である。

株分 一株の親草は翌年になれば五六本より十二三本に殖ゑる、之を春秋に一本づゝに分けて育てればよい。株分した新苗は直に鉢にも植られるけれど、一旦假植

して勢力をつけ、其後に鉢などにあけると最も良い。

芽分 芽分けをするには漸と芽が出かゝりたる、立春後十日位の處を**秘傳**である、これより後れると芽がのびて、葉の間に土が入つたり、根をいためたりして、大に勢力を弱め、又秋であるとき芽の検査が出来ぬからである。扱親株を抜きとり土を落とし、芽を一つ宛分け、枝芽(二番芽)の中の同じ位の勢力のものを揃へて、一鉢に三四本づゝ行儀よく植える、頂芽(一番芽)は事によると肥え過ぎ、あまりにはずみて、良き花の咲かぬ事がある。そこで同じ位の莖が同時に花咲かす様にするのが作り上手といふのである。三番芽以下は鉢なり畑なりに植えて、翌年の繁殖用にする。

植土 植付數月前に輕き壤土に腐りたる落葉などをまぜ、油粕を加へて積み置き屢々切返して肥土となし、篩にかけて細き軟かな土として用ひる。又此季に腐植土に人糞尿をかけて切りませ尙米の白水をかけて造る者もある。要は十分に養分を含ん

だ肥土をこしらへねばならぬ。

肥料 植土が十分に肥沃であれば格別あとから追肥の必要もないけれど、そうばかりはいかぬ。生長の模様を察して肥料をやらねばならぬ。追肥には干鰯、米糠などがよく、花になり初めてから油粕をやるも良い。

手入 植土の準備も出来、芽分をしたなら五寸鉢に四本を程度とし、鉢の大小に應じて植える、篩にかけて軟かな土を盛り、芽を植えて四五分の厚さに土を被ひ、鉢の底を叩きよく土を均らし、適度に水を與へ、芽が土の上に見えはじめたならば、よく日光にあて、強壯に育て、萬一春雪の降ることもあらば、鉢に雪の降りこまぬ様に手當をする、葉が伸びはじめたならば、鉢を少し離して徒伸びを制し、そして花蕾がいよく見初めたときに極薄き水肥をやるが良い、四月中頃になれば花が咲き出すが、五月初めは實に眞盛りである、鉢は數多いときにはあさがほの様に雛壇を作り、色の配合よく並べて賞観するが習慣である。花が終つた後は、増土

といひて、鉢一杯に肥土を盛り、夏日は乾燥に過ぎぬ様に注意し、九月迄に葉が枯れるから、此時に鉢を寄せ藁をかけて置く、水は二三日に一回で宜しい、そして來春を待つてゐる。

しやくやく(芍薬)

——毛茛科——

芍薬といふ名を見てもまんざら薬にならぬわけではありませんが、しかししやくのお薬ではありません。尤も山に自生するやましやくやく(草芍薬)といふのは専ら薬用にするのです。眞直に草丈二三尺も伸びて、春の末より夏の初めにかけて富貴な牡丹にも劣らぬ、立派な大きな美しい花が咲きます、花期はあまり永くはありませんが、一重、八重、紅、白、紫様々です。葉は少しく細長い形の小葉を多く有する復葉です、昔から作られた我國草花中の名花で、幾百種の品種があります。名高い數種をあげれば

- 初烏 はつがらす 濃黒紅 丸葩抱咲 大輪
- 錦の森 にしきもり 白に紅絞り 萬重盛上咲 大輪
- 千代鑑 ちよかぢみ 白に紅立絞り 萬重 毬咲
- 唐織錦 からおりにしき 白に濃紅筋絞り
- 倭三階 やまとかい 紅白黄の三段狂咲 大輪
- 富士の峯 ふじのみね 白八重 丸葩 大輪
- 重獅子 かさねしし 白に本紅吹上絞の 千重 大輪
- 紅三階 べにさんかい 濃紅 三段狂咲 大輪
- 獅子遊 ししあそび 濃本紅 抱咲 八重
- 玉宮殿 たまみやうてん 本紅 丸葩抱咲 大輪
- 日出世界 ひのでせかい 本紅 丸葩 外白金入 三段咲 極大輪
- 雪の山 ゆきのやま 白 萬重 盛上咲

作り方 芍薬は植ゑ換へると兎角勢力衰へ易く、従て花も悪くなる傾きがあるから、一旦植ゑたならば成る可く一ヶ所に置くが良い、土質は肥へた有機質を含む處を好み、あまり乾燥に過ぎざる、しかも日當りの好い地が適する、さて植ゑたる後、數年を経て、勢の衰へかけたものを、九、十月頃掘起し、一株に五六個の芽を有する様に株を分けて植直す、其植穴にはよく腐熟した、堆肥、馬糞などを十分に入れる、植付けの後には芽の上に土を二寸許りもかけ、其後十二月頃になれば、寒さ除けかたく、馬糞を施せば最も良い、春になれば薄き下肥を與へる、夏の間は花もなき事として兎角等閑になり易いが、成るべく根元に藁を布きて早害を豫防するが肝要である。

更に注意すべき事は大輪の花を咲かすには、一莖に一花づゝの外決して咲かせぬ様にくばり一莖毎に支柱を與へて保護し、且つ花散らば直に之を剪りとり、種子を結ぶことを許さぬのである、結實さするときつと勢分が衰へる。

せいようざくらざう(西洋櫻草)

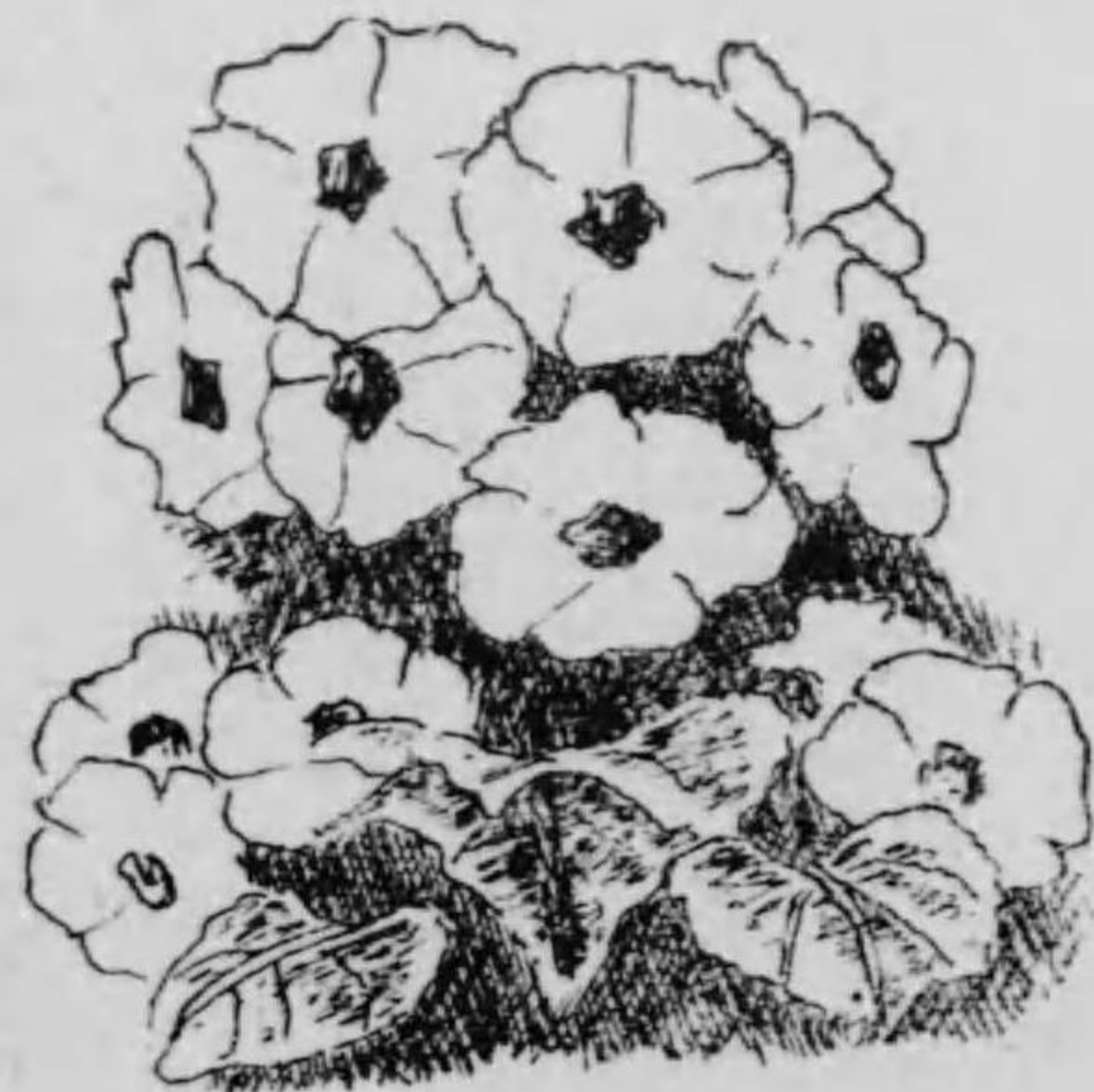
櫻草科

和種の櫻草も美しいが、此花も亦妖艶なものである、もと姉妹花であるが、和種に變種の多い様に此花にも多數の種類があつて、随分異つた花、異つた性質を有して居る、英名をプリムラと稱し、開花の季節は和種と違ひて、木枯吹き荒む寒き季節に、何處を冬と知らぬ顔に笑ひ初むるのである。

種類 寒さに強い性の花と冬に耐えかねるものとある。左に主なる種類を記す、

プリムラ、シネレンス 寒櫻ともいふ、花は一重、八重種々、色も様々、葉の間から抽出て花莖の上に繖形花序に群生する、葉は大きく大

うさらくさうよいせ 圖七廿第



112
體心臟形で、深き缺刻ありて數片に裂け、縁に鋸齒があり、葉や葉柄に毛が多い。
温室で育て嚴冬の中に花を咲かすに適する。

プリムラ、オブコニカ(一名プリムラ、ポクリフォルミス) 四季咲櫻草とも名づけて珍重する、花は淡紫が多く、紅、白もある、形はあまり大きくはないが姿はおとなしい。花莖の葉の間より數本生じ繖形花序に咲く、葉や葉柄に毛が多い、葉は葉柄長く、廣き楕圓形、縁に鈍鋸齒があり又は波状をなして居る。

プリムラ、フォルベシ 此種は草丈が小さく、特に温室培養に適する。花は小形で淡紅色をなし、花莖は高く抽き出で、數段は花が輪生する、葉は小さく、楕圓より卵圓形をなし、縁に鋸齒ありて葉柄がある。

プリムラ、キューエンシス 此種の花は黄色で花筒が特に長く、萼は深く五片に裂けてゐる、花莖は葉叢の間から高く抽き出で、花が數段につく。葉は卵圓より楕圓に至り、葉柄に向つて狭く少く筧形に見える、縁の鋸齒は鋭く、色は少しく黄味

を帯び、時に白粉を被ふものもある。

プリムラ、ボリアンダ(一名プリムラ、ヴァリアピリス) 西洋櫻草中で最も普通のものである、花は黄又は黄赤色で、花莖高く葉の間より抽き出で、頂に繖形花序に咲く、開花の季節は四月頃である。葉は楕圓形で稍筧形をなし、葉面に皺があり、縁に鋸齒がある。

プリムラ、ヴァルガリス(一名プリムラ、アゴリス) 花の形は前種に似てゐる、色は淡黄色が普通で白、赤、紫などもある、そして花莖の上に一箇づゝさく。葉も前種に類する。四月頃に花を開く、英語でプリムローズといふのが此種である。

プリムラ、オリクラ 花は鮮黄色が主で、又紅、紫などもあり、芳香を有するが特色である、繖形花序をなして、高く抽き出た花莖の上に咲く。葉は卵圓か楕圓で基部に少しく狭く、葉柄なく、葉肉厚く、葉面滑で、粉を有し、縁は上部の

みに鋸齒がある。四月頃に花咲く。

プリムラ、エラチヲル 此種は英語でオックスリップといひ、花は形小さく、黄色で佳香があり、繖形花序をなして高く抽出た花莖の上につく、葉は長き楕圓形で毛を有する、四五月頃に花咲く。

種播 自ら種子をとることは餘程栽培に熟練した人でなければ出来ぬ。特に種類の良いもの程困難である。そこで精選した種子を種苗商より買入るゝが良い、熱心な栽培家は直接歐米から取寄せる、一袋一圓以上種類によりては二三圓もする。

扱て之を播くには四月六月七月と三回に播くがよい、これは播く季節をかへて、花を十月から翌春四月迄に咲く様にするのである、又四五月にならねば花の咲かぬ種類は、前年の三四月頃に播くのである。

播き方は種子が小さく、且つ高價のものであるから丁寧にする、まづ平鉢か浅い箱に粗粒の土を入れ、其上に腐植土六割に砂四割をまぜ、篩にかけた土を盛りて、

よく表面をならし、細目の如露にて水をそゞぎて種子をまき、よくおしつけその上を古新聞紙などにて被ひ、日光に直接當らぬ様にして暖かな處に置く、尙濕氣を與ふるときには、鉢を水に浸して水を吸上げさするか、或は霧吹きにて水を吹きかけてもよい、一二週間で發芽する、芽の出た後も強き光線に當てぬ方がよい。

本葉一二枚出ると、一本づゝ植かへる、此時は軽い肥土を用ひる、三四葉の頃尙一回移植し、更に生長を待ちて五寸鉢か六寸鉢に本植をする、此植えかへる程度は根が十分に伸びて鉢の底を見て白根の見える頃である、植え方は深きに過ぎぬ様に注意し、灌水は乾き過ぎぬ様に氣をつけて施す。

夏の日中は日光の直射を避けて蔭簀の下などに置き、夜は露天に曝す。九月末か十月初めにもなれば、春早く蒔いた分は、可なり育つから、この時から温室か木框内に入れて育てるとやがて花が見えて来る。

春咲きの種類は、寒さに耐ふる性が強く健康であるから、簡単な霜除で十分であ

る、又種類によりては、東京邊ならば霜除もいらぬ程である、然し早く咲かせんとするには、木框内に入れ、雨雪の日や夜間は蓋をなし、日中は十分日光にあてるがよい。

すべて葉は常に清潔にし、且つ伸び過ぐる事のなきやうに制する、さもないと花が葉かくれになりて、甚しく風致を害ふ。

ゼラニウム

牻牛兒科

天竺葵ともいふけれど、ゼラニウムといふ學名の方が通りがよい。此花作り様によりては春より秋かけては無論の事、温室育てて冬もいさくと美しき花を見せらる。花は繖形花序をなし、紅、白、薄紅様々で一重も八重もある、葉は對生、圓味の腎臓形で欸冬の葉の形をしてゐる、葉面に色々の環紋があり、葉縁に鈍き鋸齒がある、莖は下部は灌木状をなし、草丈は多く一尺以下位である。多くの變

第 廿 八 圖



- 1 ゼラニウム
- 2 ミムナス
- 3 ランタナ

種がある。

い、ネールスシュエー、ゼラニウム(紋葉種) 葉に馬蹄形の紋がある、此種にも尙多くの品種がある。

ろ、アイヴィーレブド、

ゼラニウム(葛葉種) 莖が蔓性で、葉は葛に似てゐる、釣り鉢などに植ゑるこれにも多くの品種がある。

は、オークレーヴド、ゼ

ラニウム(櫛葉種)

葉は槲の葉に類し、又菊葉種ともいふ、芳しき香を有する故、麝香種とも稱する。

に、ラージ、フラワー、シヨ（大花種） 植木屋はベラゴニウムといふ、葉は掌状に裂け、托葉あり、花瓣は不整である。

作り方 新しき品種を作るのでなければ、蕃殖は挿木が一番に良い。季節は温室か又は木框の中で育てるならば、何時でも差支へない、然し春秋は最も好季であるまづ硬く育てる枝を二三節位に節の直下部より切り、之を砂と畑土を半分づゝ混ぜて作つた床に挿し、適度に水をそそぎて、強き日光の直射を避けて育てると間もなく根がつく、それより一旦小鉢に移し、だんく育て、七八寸鉢にして花咲かす、小鉢の内は蕾が出てもつみとりて咲かせぬ方が、結局後の爲に良い。

肥料は堆肥や灰の類を施す外、油粕の水肥を用うる、然し施し過ぎると莖が徒伸びして風致を悪くするから、適度を失はぬ様にし、又灌水も多くを忌むものである。

る。

花咲きたる後は、枝の儘切りとりて、實を結びせぬ様にすると、勢よく新芽が續々發生して新しく花を着くるものである。

かく年中花咲く植物なれど、寒さに弱いもの故、冬の間は必ず十分の防寒の設けが必要である、温室を有するものは勿論此中に入れて保護すればよいが、なき者は十月末よりは室内に入れ、晝間は七十五度位、夜間も六十五度位の温度にて培養せねば枯れて了う故大に注意を要する。

すゞらん (鈴蘭)

——百合科——

白い小さな鐘形の花が、幾つも總状につながつて花莖の上に咲き出す有様は、可愛らしい風情である、英名を意譯すると「谷間の姫百合」といふ優しい名を持つてゐるが此頃でこそ世の中にもてはやさるゝ様になつたが、二十年前にあつては殆んど



顧みる人もなかつた位なものである。元來此草は北海道などにあつては野原に自生があつてわざ／＼栽培する價値もない位のものである。然し我が國の野生の花こそつまらない、洋種中の變種は高さ香氣があつて、重瓣もあり、花の色も薔薇色のものがあり、葉にも黄斑のあるものがある。小鉢に植ゑて几上に置けば香氣、室内に充つといふ程である。

作り方 種子でも蕃殖するけれど、普通は株分けをする、ところでまづ秋、根莖を掘起して芽の出づる部を傷めぬ様、切り分け、之を別々に鉢植又は框植にし、植土は砂、腐葉土などを用ひ、芽の發生すべき部を現はして、其上に軽く水苔を被ひて濕氣をもたせ、華氏八十五度位の温床内に於て育てれば、花莖を生ずる故、それを他の鉢に移して觀賞に供する、もし花壇植ゑにするならば、夏の強烈な日

光にあたらぬ様な位置を選び、且は適度の濕氣を常に保たしめねばならぬ。

バイオレット(にほひすみれ)

—— 堇菜科 ——

新しき人に愛さるゝ新しき花、戀を語る花、愛を叫ぶ花、誰が移香か、えもいはれぬ薫り、此高さ薫りはやがて香水の源である。さればこそ和名を「にほひすみれ」又は「麝香すみれ」などに名づけた、英名の意味から見ても花の色は紫が本色であるけれど白もあれば紅、黄もある、又一重も八重もある、花の形は普通のすみれに見る通り不整である。葉は葉柄が長く圓き心臟形をなす、根元から葉が叢生して三四寸、高さにしかならぬ。寒さに負けぬけれど、暖かに保護すれば早春には咲き出す。作り方 春又は秋に根分け、挿木又は種子を播く、種子ならば六月頃種子の熟するを待ち、直に取播きにする、先づ平鉢に軽き壤土を篩にかけて盛り、其上に種子をまきて、極淺く土をかけ、適度に水を與へ、少しく日陰に置きて發芽をまち、苗

一二二
が二三枚の葉を出したる後に植ゑる、此場合一度他に假植して根を造らせると更に
良い。根分けは普通菊などにする通りに、大株を分けて他の鉢などに植ゑるのでこ
れは最も簡単である。挿木は平鉢に砂土を盛り、若枝を親株より切りとりて挿し、水
を十分に與へ日蔭に置いて根の生ずるをまつのである。肥料は基肥としては堆肥、
油粕、灰などを用ひ、後生長の模様を見て薄き水肥をやる。

びじよさくら(美女櫻)

馬鞭草科

一名、はながさ(花笠)

五片に分れた花の形は櫻に似てゐる故に此名をもらつた、夢も花冠も下部は管
になり、上部だけ平に開き、紅、白、紫、藍、絞、覆輪等様々の種類があつて、
随分妖艶な小花である。葉は對生し、縁が切れこみ、莖葉に毛を生ずる。花壇に種
々の彩色をとりまぜて植ゑると、頗る美しい、花期は晩春の頃より秋まで咲きつ

づく。

作り方 始めて之を作るときは、春か又は秋に、苗床をつくりて種子を播き、苗
が育つをまちて花壇などに移し植ねばならぬが、一旦株を作つた後は取木又は挿木
で殖やすが、簡単である、此草は地上を匍ひまはりて、其節々より根を生じ、それ
より新芽を出しますから、之を得て新株とすることが簡単である。

ひなぎく (雛菊)

菊科

一名、えんめいぎく(延命菊)

英語でデエーヅエーといふ丈低き草で、根元から花莖が出て、上に白か紅の小さな
菊の様な花がさく、これが春より夏に亘る。葉は匙形か長き倒卵形である。この草
は小さくて花期が長いから、花壇の縁取やら、花園内の模様植ゑなどに適する。

作り方 通常秋九月か十月初め頃に根分けをするけれど、秋の初めに種子を播

くも良い。肥料は油粕、魚肥などの薄き水肥をやる、此草は寒気に強いけれど、炎暑に弱い故、日當りの良過ぎる處に置かぬ様にする。

フクシヤ

柳葉菜科

赤い、紫、白い優しい花が、枝から提灯の様にぶら下つて居る、誰致には乏し

アシクフ 圖卅第



いけれど、鉢植ゑとして珍重せられる、莖は筒形、四個に分れて彩色を有し、花瓣は圓く奇形をなし兩蓋が中から突出てゐる、葉は對生し、細長か卵圓形で、莖に赤味を帶ぶ、多年生の草木より灌木性までになる、花期は至て永く春の末より秋の末まで咲く、色々の變

種がある。

作り方 挿木で蕃殖するのが通常の方法である、挿し穂は蕾のつかぬのを選び、平鉢などに砂と土とを半分／＼に混ぜたるものを入れ、之に挿して、日陰に置き適度に濕氣を與へ置けばやがては根を發する、それより一本づゝ小鉢に植ゑ、相當に育ちたる後に適當の鉢に植ゑこむ、植土は眞土に厩肥を混じ、積み置いてよく腐つたものを用う、鉢植ゑは水のされぬ様に灌水し、補肥には油粕などを用うる。

此草は冬の寒さに耐ふる力が弱いから、秋の末から防寒の設備を與へ、木框内に置くか、温室に入るゝか、其設のなき者は、暖き位置に穴を掘りて之に入れ、枝を短く切りつめ、穴の上には蓆などをかけて寒害を受けぬ様に保護を與へることが肝要である。

ふくじゆさう(側金盞花)

毛茛科

「ぼつかりと日の匂ひけり福壽草」、山や野にありて雪間を分けて、淺き日影に笑ひ出すを見ると、全く春の來たのを報ずる無心の使とも思はるゝが、都の人には此山野自然の美に直接に觸れることは殆んど不可能の事で、盆栽の花で満足せねばならぬ。東京に出るものは武州青梅産が幅をさかせてゐる、黄色の一重は普通であるが、八重もあり、撫子咲もあり、二段三段に咲く種類もある、花の色も黄の外に白紅などいふ珍品もある、葉は胡蘿蔔の如に細裂し花の後に生じ、草丈は十分生長しても四五寸に過ぎぬ、温室や木框仕立となして十二月の末には咲出させ、新年の飾り花として、又其名の福壽草といふ目出さにあこがれ、其上に割合に價の廉き故に誰にでも賞觀される。

作り方 宿根であるから自由に根分けが出来、且つ強壯で容易に枯れることなどはない、通常は花の終りたる後に直に根分けして、夏はあまり日の當らぬ涼しき地に植ゑ、十分肥料を與へて育て十一月頃になりて掘り出す、これは上州地方な

どより東京の植木屋に卸す花である、植木屋はこれを框や温室で育て、年の暮の市に賣り出す、又九十月頃、壤土の十分肥料分を含めるものを植土となして鉢に移すもよい、根は粗大で數多く混雜してゐる故に、すべて之を植ゑるときには、根の間に土の入りて空虚にならぬ様に注意せぬと折角培養したものを枯死させることがある、亦よく水をかけることを怠つてはならぬ。

肥料は植土が肥えて居ればわざわざと與ふるにも及ばぬが、秋の末の頃と花の終つた後とに油粕の水肥でもやれば更に結構である。然し價の安いものである故であらうが、兎角都人の自ら古株を養成する栽培家は少く、多くは毎年、年の市などに買入れ、花が終ると鉢と共に庭の隅になげやつて顧みぬ者が多い、これあればこそ植木屋の商賣も繁昌する譯ではあるけれど、花に對する親しみの薄いものにも驚かざるを得ない、せめて之を地植ゑにして肥料位を與へて貰ひたい、さうすれば一度買ひ入るれば數年間賞觀され、花に對するの注意、愛情が自然湧くに相違ない、

これは遂餘計な小言で御免下さい。

珍らしい新品種を作り出さうと思ふ人は種子を播付けるけれど、花咲く迄には五年もかゝり熱心な研究家でなければ出来ぬ仕事である。

ヘリオトロップ

——紫草科——

小さな灌木状の多年草で、木立るり草ともいふ、花は五瓣の小花で枝の先きに多数叢生し、藍紫色が白色で佳き香がある、それ故に香水草とも稱する。葉は互生で細長く葉面に皺があり毛がある、高さ一二尺に過ぎぬが普通であるが作り様によりて著しく伸びることもある、鉢植として賞せられ、切花によい。

作り方 挿木にて殖す、砂まじりの土に挿し、適度の湿気を與へ置けばよく根を生ずる、其後適宜鉢に移して育てる、冬はゼラニウムなどの如く温室か、又は木框内に入れて、十分暖かに保たねばならぬ。

まつばぎく(松葉菊)

——蕃杏科——

英語でミッドデー、フラワー即ち日中花の意、日の照る中は開き、夜に眠るのが数日間に亘ることはまつばたんやふくじゆ草に似てゐる、花の形は菊に似て桃色か白色をなす。葉は線状でこれもまつばたんやに似て多肉、對生し、葉腋より枝を分かち、先きに一個宛、花がつくこと春の末より秋まで續く、草丈低く下部は木質であるが、或種は蔓性で匍匐するものもある、普通種、小葉種、大葉種など種々ある。

作り方 栽培は至て容易く、通例殖やし方は挿木法で、砂土を平鉢に入れ二三節に切りたる枝を挿し、適度に水を灑ぎ、温室か木框内に培養すれば根を生じ易い、季節は秋がよく、育ちたる株は翌春までに見事になる。又春夏の候に露地にて挿木してよく成効するものである、冬になれば木框か又は低温の温室に入れて防寒の備を與へる必要がある。

ミムラス

玄參科

此草は半ば灌木状にもなります、英名を野猿花(モンキーフラワー)と申す、あまり猿の形もしてゐませんけれど、花は唇形の花冠で、上下の二唇になり、上唇は二裂して上に立ち、下唇は三裂して擴がる、雄蕊は四本、雌蕊の柱頭は二本になり、萼は角立ちて筒形、まづチョット違つた形の花で、色は黄、紅、紫とりまぜて様々の模様をなし、地色が黄で下唇に二個の深紅又は紫の斑點のあるものや、深紅又は紫褐色で天鵝色の様にて斑點あるものや、褐色か藍色で形の殆ど正しきもの又一重もあり、八重もあつて至つて美しい。葉は對生で、形は種類によりて多少異り、卵圓、楕圓等ある。草丈は一尺位のもあり、二尺以上に達するものもある。花期は五月より九月に亘る夏の花である。

作り方 種子より蕃殖しやうとする場合には、平鉢か木箱などに輕き土を盛り、

これに種子をまき、成るべくは土をかけずによくおさへ、濕氣をもたせて、暖かな場所に置き、發芽を促す、苗が三四葉を生じた頃に一本づゝ花壇に植つけるなり、鉢に移すなりする、生長中に薄き水肥にても與ふれば十分である、但し乾燥せぬ様に注意せねばならぬ、又草本性のものを蕃殖しやうとする時に、地下莖を掘り起し根分けをして差支へがない、イヤ此方は遙に輕便である、時節は早春を選ぶ。

(第廿六圖を御らんさい)

マーガレット(パリデージー)

菊科

これは矮性の半灌木の性を有し、パリデージーともいひ、木春菊とも稱する。花は枝頭に一個づゝさき白花にて中心花は黄色、春より秋までさきつゞく。葉は互生して羽狀に裂けてゐる。高さ二三尺に伸びる、鉢植にもすれば、花壇植によい、また切花として多く需めらるゝ。

作り方 栽培法は甚だ容易であるけれど、寒気には甚だ脆く、花壇で其儘越年することは出来ぬ。それ故冬の間は木框内に入れるか、又は温室内で育てる、翌春五月頃晩霜も全く終りたる後に植まつけ、六月頃より九月頃までは挿木にて殖やすことが出来る、花期は至し長く花壇植ゑ、切り花、いろくくに賞せられる、十分暖かに温室内で育てると冬の中も花の絶えることがない。

ランタナ

馬鞭草科

俗に七變化といひ、花は紅、黄、白等咲いてゐる間に色々に変化する性がある。葉腋より出でたる枝の上に美女櫻に似た小さき花が多数咲き出す。葉は倒卵又は楕圓形で、縁に鋸齒があり、若芽は草質であるが、基部は灌木状になる。鉢植にもよく花壇植にも適し、廣く觀賞せられ、五十種以上の品性がある。

作り方 挿木法にて蕃殖し、季節は夏季がよい、其法其年の新枝を二三寸に切り

て、細砂を入れた床地又は平鉢に挿せば容易く根を生ずる、之を鉢植にし又は露地に植ゑる。但し寒気に弱い故、室外に出すのは五月後にして、冬の間は温室内か木框の中に入れ置く。(第廿六圖を御らんさい)

ルビナス(はうちまめ)

荳科

冬を越して多年草としても育つが、一二草の事も有る、花は荳科特有の蝶形で二三尺に伸びた花莖の上に總状花序をなして、白、紅、紫、藍等の花がつく。葉は多くの小葉に掌状分裂をなし、羽團扇の様に見ゆる、花壇や鉢植となし、又切り花にもする、花期は五六月頃である。

作り方 春秋ともに播種するけれど、秋播きがよい、鬚根が少なく、移植の成績が良くない故、床に播かず直播きして後に間引して育てるがよい。

六、球根類

一三四

アネモネ

— 毛茛科 —

この草にはおきなくさ(白頭翁)といふ爺むさい和名はあるけれど、野にうつむいて咲いてゐる紫赤色小花の白髪の様な葉莖を有するつよらない野生のものではなく、近年になりて西洋から輸入した、大きな美花を咲く同種の草花である。通常は四月頃に咲き、花は形、罌粟に似て居り、萼が花瓣の様に艶麗極りなき色になるのである、一重咲もあり八重咲もある、葉は縁が深く裂たものや、羽の様な形に細くなつてゐるものもある、高さ一尺位になる。

種類 極めて多く八十五種もあるが、其内普通に栽培せらるゝ美花をいへばア、コロナリア種 一尺以下、葉は細かに裂け、萼片は多くは六枚、罌粟咲アネ

モネといふ、花期は三、四月頃

一重咲

ザ、ブライト

キング、オブ、スカイレット

レッド、ドラゴン

八重咲

白

緋

深紅色と白

ブラツシユ、ビュイター

白に淡紅

ローズ、ミグノン

紅

スノー、ポール

雪白、菊咲

第一世圖 アネモネ



一三五

ア、ホルテンシス種 花は稍細長く且く開きて星形をなす、葉も稍廣く、疎らに裂く、花期は四、五月頃

ジュエル

紅紫色で底は白

ホワイトゼム

白に底藍

ア、フルゲンス種 花少しく大、緋色、花期は五月頃

マルチペタラ

緋色にて心に黒斑ありて瓣多し。

マルモラータ

緋色に多少の白斑がある。

ア、ネモローザ種 高さは七八寸位、花は白か淡紫色。根は匍匐状、日蔭を好

む

アルバ

白の一重

ロビンソニアナ

淡紫の一重

ア、ヘバチカ これは雪割草といひ又すはま草、みすみ草など、もいひて、我國

の山地に自生する小草で、花莖四五寸になり、毛を被ひり、萼片は紅、紫、白等のやさしい花がさく。葉は三裂葉をして長き葉柄がある。早春に咲かして鉢植などにする。いちりん草、にりん草なども同類の草です。

ア、ヤポニカ 秋牡丹といふ草で、これも山地に自生して葉は三小葉より成りて、牡丹に似てゐる、高さ二三尺に伸び、多数の萼片を有する、大きな紅色の菊の様な花を咲く、花期は他と違つて秋九、十月頃である。

作り方 主に作らるゝ一等美しい罌粟咲の事をかく、他は皆之に準へば良い。

水排きがよくて、あまり日當り過ぎぬ、輕き質の肥えた土地が最上の適地である、植付けの季節は秋か又は早春で、暖地ならば私の方がよい、植付けの地には豫め厩肥などにて十分に施肥し置き、球の距りを五六寸にして一二寸の深さに植込む、發芽後は花の咲く迄に數回水肥をやり屢水をかけて乾燥せぬ様にする、蕾の出たる後は毎日本水をやらねば美大な花にはならぬ、花が終らば種採り用のものを除く

外は皆、花莖を切りとりて、塊莖の勢力を増させ、六七月葉の枯るゝ頃掘とりて乾所に貯へ植付の季をまつ。

鉢植ゑの時はまづ腐葉土、厩肥のよく腐熟した土を用ひ、腰高鉢の底の方には後に追肥をやらぬもよく成長するために馬糞、油粕を入れ、此肥料に直に球が觸れざる程度に植ゑ、植付た後、水を多くやり、特に花の時は乾かぬ様に屢水を與へる十一月末頃から木框内に入れて寒さを防ぐと、翌年一月には早咲のものは咲き出す様になる、花後の取扱方は普通の露地栽培と同様でよい。

蕃殖は通例子球からで、親球の廻りについた球をとるか、又大球を三個か五個に分割して植ゑても良い。又種子からも蕃殖するが、此法ならば取り時にするが良い、種子は砂か灰を混じて蒔くと都合がよい、凡二十日も経てば發芽するから、それより葎蕒などで日覆をなし、極薄の下肥か油粕の水肥を二三度もやる、秋になれば日覆はとるが、寒くならば霜除けを與へる、二年目の三四月になると全部の二割位に

花が咲く、三年目には全部花をもつであらう。

アマリリス

石蒜科

花は全く百合の花と同様で大きな美しいもので、温室作りならば冬の中に咲かす

ることが出来る、並の作りならば夏の初め眺めによい、葉は細長き蔓状で厚く数は少なく十枚以内に過ぎぬ。花莖は一尺位になり、頂に少きは二個多きものは六七個の花が咲く。

種類

ヒ、オーリカム 花は濃紅で

圖 二 卅 第



- 1 アマリリス
- 2 アロキシア
- 3 グラジナラス
- 4 カンナ

莖部は緑、通常二個をつけ葉大、

ヒ、バルチナム 花は緑黄に赤の斑點がある。通常二個、葉長大、

ヒ、レチキユラタム 花は紫赤に緋の斑紋があり、三以上六花をつく、葉は短大、

ヒ、レギネー 花の色は紅色、二個以上四個、葉は落花後に大きくなる、

ヒ、レオホルヂー 紅に白を混ざる大花、通例二個葉長し、

作り方 鉢植が主であるが無論地植系にてよい。まづ鉢植系からいへば、三四月頃に六、七寸の鉢に植ゑつける、植土は粘質の壤土に砂を混じこれに腐葉土を交ぜたものを用ひ、植ゑ方は球を少し地上に露出する程にする、季節は三四月頃である、かくすれば六月頃は花を開く、地植系の節は用土も同様であるが唯植ゑ方は鉢植ゑよりも深くして球のかくれる程にせねばならぬ。

然るに冬の間花を咲かせんとするには、九月頃に地植ゑしたものの、中の特に肥大せる球を選定し、掘り上げて之を鉢植ゑにし、其儘土中に埋め、莖の枯れる頃に

硝子障子のある木框内に移し、少量の水分を與へて低温にして休ませる、一月頃にならば之を温度の高からぬ温室内に入れ置くとかやがて成長を始めるから、其度合を見計つて水を増し與へ、今度は高温の日當りよき温室に入ると速に花莖を出して立派な花が笑ひ出す。花の終りたる後は鉢より抜きとりて地植ゑにし十分に肥培する、兎に角冬季には十分に休ませねば葉ばかり生じて花にならぬことがある、特に鉢植ゑにしたものは非常に勢力が衰へる事から時々地植ゑにし勢力を恢復せしめる必要のあるものである。

蕃殖法は親球の周りに生ずる子球を分けて植付るが普通である。種子を播くのは新種を作り出さんとする花屋の仕事で、これは播種後三四年培養せねば花は咲きませぬ。

オキザリス

酢漿草科

横着な花で晝間だけ開いて夜は睡る花です、これは本邦のかたばみと同種である
 それ故花かたばみともいひます、多くは春早く咲く様に造りますけれど、別に花の
 季節はさまざま草です、花は紅、白、紫、黄など色々あり、花冠は五片づゝ、
 雄蕊は十箇ありて長きもの五本、短きもの五本あります、雌蕊は柱頭が五つに分

スリザキオ 圖三卅第



れ、果實は莢が熟すると強く裂けて種子を飛
 でちらします。葉は通常三枚の小葉より成る。
 種類 花の大小、色の様々、多くの種類が
 あります、普通の種類を二三種いへば
 オ、パリアピリス 花は花莖の上に一個咲
 き、大きくして色は紫、赤、白等、葉も稍
 大きく鱗莖は甘藷形。

オ、テトラフィラ 紋かたばみといふ、花

は赤く花莖の頂に簇生す。葉は四個より成る。

オ、ラシアンドラ 花は數多簇生して紅色。葉は五以上十枚の小葉で車葉になつ

てる。

作り方 通常は子球を分けて植ゑるけれど、種子でふやしてもよい。砂質の壤土

は最も適地である、然し日當りのよい濕氣の多からぬ處ならば何處でもよく育つ。

植付季節は冬の内に温室や木框内で咲かする様に作らば九、十月頃に鉢植にし、夏
 から秋に咲かするには、春になつて植付ければ良い。栽培は至て手輕いが、數回水
 肥を與へると更によく生長する。

カンナ

曇華科

草は芭蕉に似て、花は蘭に似たもの、夏の初めより秋の末までかはり／＼咲き續
 いて居る、左程興味の深き花でもないが、五六尺にもなるから花壇の後の方などに

植ゑるに、適當である、花の色は紅、黄、樺などが普通で覆輪、絞りもある。
作り方 貯藏して置いた根莖を、四月頃一二尺の距りに植ゑつける、肥料は堆肥
や灰、油粕などがよい、葉の大きな草故に水分を要求することは多い、補肥は適宜
薄きものを與へるに止る、栽培至て手輕である、秋の末になり花が終り葉の枯れ初
むる頃、根莖を掘り起し、二三日乾燥した後、日常りの良い暖かな土中に埋め置
きて、翌春植付けの期をまつ。(第卅圖を御らん下さい)

グラヂオラス

—— 鳶尾科 ——

唐菖蒲といふ和名をもらつて居るが、花は一本の花莖の上に數多着き、だんく
下方より咲き出して上の方に及ぶ、形漏斗狀で白、紅、黄、紫等で縞、紋のも
のもある、葉は劍狀で細長く立つ、草丈二三尺になり、花壇にも植ゑられ、切花
にもなし、又は鉢植ゑともする、近來の流行花の一である。

種類 多數あるが其主なる種類を掲ぐる。

- オーガスタ
- リリー、レーマン
- パロン、ユーロツト
- アメリカ
- アドミラル、トイゴ
- ブラッシング、ブライト
- ブリ、アント
- クリムソン、クキン
- アポロン
- ピンク、パーフェクション
- アムステルダム

- 白、莖長く、美し
- 乳白に淡紅を帯ぶ、大輪
- 天鷲の様な藍
- 紫紅
- 薔薇色
- 白に紅斑
- 緋紅に紅縞
- 橙緋色に紫斑
- 黄に紅斑、白縞
- 桃色に白斑紅覆輪
- 紅色

クキン、ビクトリア

緋に白斑

作り方 土質が濕潤ならざる限りは栽培するを得べきも成るべくは軽くして水排
 さよく腐植質に富んだ處がよい。普通三四月頃日當りよき位置に球根を植つける、
 花壇寄せ植ゑなどの場合は植穴を掘り、厩肥、灰、油粕などを入れ、五寸位の距離
 をとりて植ゑ込む、又切り花用としての畑作りならば、一尺二三寸の畦間に三寸置
 き位にする、基肥は寄せ植ゑ同様で良い、尚ほ生長の度を見で水肥をやる必要があ
 る、莖が伸びたらば支柱を立て、風に吹き倒されぬ用心をせねばならぬ、又花の後
 は莖をさりて種子を結ばすることなく、球根に勢力をつける、秋葉の枯るゝをまち
 て根元より切り掘り起し、よく乾かし後冬の中凍らせぬ様にして貯藏する。
 鉢植ゑにするには矮性のものを選び、鉢の大きさは徑五六寸とし、三球位づゝ植
 ゑつけ、その後は適度に水をかけ、二三回薄き水肥を與ふる。

(第卅圖を御らん下さい)

グロキシニア

苦苣苔科

南米ブラジルの谷間から見出された田舎者の此草花は、草花の鳥渡少くなつた六
 七月頃の室内を賑かしてゐる、花は續々發生する花莖の頂に一箇づゝ着き形鐘
 の如くにて上向きに開き、瓣は五片に裂け中は重なり合つてゐる、色は紅、白紫、
 絞り、覆輪等で實に鮮かな立派な花である。葉も亦なか／＼振つたもので厚くて大
 きな楕圓形で天鵝絨の様に美しいから、花の咲かぬ中でも愛玩する價值がある、花
 期は普通六、七月頃である。

種類 美しい花咲く良種は

アルバ 白花

アイグバルス、クリムゾン 緋色

クラリベル 白に緋の班點がある。

ゴリアス

カイゼル、ウキルヘルム

プリンセス、メー

プリンス、ウエールス

紫地に白の厚い縁取り

深紅色に白の縁取

白に淡紅のぼかし

紅色

作り方 この草花は通常鉢植えにするものであるが、まづ壤土によく腐熟した腐葉土をまぜ、少し砂をも交ぜて水排きをよくし、之を植土として三月頃、四五寸の鉢に球根を一箇づ、浅く植え、六十度以上の温度の温床か又は木箱に入れ、少し湿氣を與へて日陰にして發芽を促す、芽が出たならば少し温度を高め、日光にあて、水を多くし、二三回油粕などの薄き水肥をやる、強き日光は葉を枯らす恐れがある故氣をつけねばならぬ、水をかける時は決して葉にかけぬ様にする、花にならば特に空氣の流通をよくし、又花が終らば直に花莖を切りとり、漸々に灌水を減じて遂に全く止め、葉が枯れたならば冷かな乾燥した場所に翌春まで貯ふる。

此草花を殖やさうとするには挿葉と播種と二法ある、挿葉は花の過ぎて葉が十分に生長した時に切りとりて日陰に設けた床に挿し絶えず適度の濕氣を保たしめて育てる、又種子を蒔く時は、二月頃平鉢又は箱に肥土を入れ、平に均らし、疎く種子を蒔き、底より水濕を吸ひ上げさせ、鉢の上には硝子を載せ置き六七十度の温室内の日陰にて發芽を促し、芽が生じたならば、よく日光にあて、強壯に育てる、三四葉になりたる頃に、肥土を盛た小鉢に苗を一本づ、植えつけ、やがて生長の度を計りて適當な鉢に植ゑかへる、其後薄き水肥を二三回も與へると七八ヶ月の後は花をもつ程になる。(第卅圖を御らん下さい)

おふらん(洎英蘭)

鳶尾科

クローカスといふのが此草で、細き線状をなせる幾本かの葉の中から、突出して漏斗状の葉に比べると數等大なる花がさく、春咲種と秋咲種とに分れ、秋咲きのも

のは薬用「さふらん」といひて、紫の花が咲き、其中から雌蕊の花柱が突出る、之を取りて婦人病の薬にする。春「さふらん」は又花「さふらん」とも稱し、早春に外の花よりも、早く咲き出すので特に賞せらる春、さふらんには紫、白、黄、金黃、紫色種々の色があつて中々美しいやさしい花である。

第卅四圖 さんらふさ



特に注意せねばならぬ、肥料は堆肥、糞灰などを球根植付の際に入れるがよい、未熟の有機肥料や濃き肥料は決して根莖に觸れぬ様に氣をつける、濃き肥料は根をか

作り方 春さふらんを作るには、秋九月頃、床を用意して、二寸位の深さに球莖を一つ／＼植ゑつけ、間隔は二三寸とする。此草は寒を恐れぬもので性質も強く、防寒の具は何等必要はないだらう、植付けた後は糞釋などを

らす事がある、開花前には一二回薄き水肥をやれば一層よい。春さふらんを鉢植にするときは四寸鉢に四五球の割合をとる、春さふらんは花期の早いので特に珍賞され、丈短き故に花壇縁取に最も適する、花終りたる後は掘りとりて秋植付の時迄貯へ置く。

シクラメン

—— 櫻草科 ——

俗に「ふたのまんぢう」といふが英語の意譯であらう花も葉も愛らしい草である、種類は様々あるが、花は細長き花莖の上に、唯一つつき、頭を下げて咲き、色は紅、白、紫などで花冠は深く五つに裂け、花筒部浅く各片は逆に反轉し、萼も五つに裂け、五本の雄蕊は花筒部に生じ子房が球形で多くの種子を有する、葉は圓き心臟形で葉柄長く、地下莖は塊状で扁圓多肉である。

種類 塊莖、葉、花等の異同で十數種、幾十品種に分けられてある。其の中の主

なる品種を示せば

アルバム 白、底に紫の斑點がある。
ロゼアム 薔薇色。

第 五 世 圖 ン メ ラ ク シ



是等は春咲シクラメンで、塊莖は球形、葉は花と同時に顯はれ、形卵圓で白斑あり、耐寒の性強く冬より早春に咲く。

ピコロール 純白、葉、花共に美しく大きい。
サルモネウム 帶黄淡紅色、美。

塊莖大きく、扁圓をなし、下部の處々より根を生ずる、葉は卵圓心臟形、縁に鋸齒があり、葉面に白斑がある、花は早春葉と共に出で、大きくして美しい。

カーネウム 此種は塊莖が扁圓形、底より根を生じ、葉は表は濃緑、裏は紫、葉柄短し、花は小さく春葉と共に出で、色は深紅で、花冠の基に濃い斑點がある、寒氣に強。

作り方 よく寒さに堪へ且つは陰地によく育つ故に少しく樹蔭になる處の水排きよい位置を撰んで植ゑる。植土にはよく腐つた落葉を混じた壤土に少しく砂をまぜた者が適する、植ゑ方は塊莖の芽の出かたによつて數片に分け浅くして、塊莖の地上に見える程がよいとしてある。植付季節は開花期の春秋とによりて、五六月か十、十一月頃とする、冬の間は落葉や堆肥などで寒さを防くと傍ら肥料にもなりて一舉兩得である。

種子より仕立てる時は、先づ成熟した種子をとりて、砂土を盛つた鉢に蒔き、木

一五四
框内に入れて置く、發芽して苗が伸び初める頃に一本づゝ小鉢に移植ゑる、長じた後に花壇に植ゑるなり、又は他の鉢に移す。

鉢仕立は、夏蒔きの苗なら、十一月頃に第一回の移植として一寸位づゝの距りにて一個づゝ同じ鉢に植ゑ、冬の間は木框か又は温室にて保護し翌春三月頃にもならば、一個づゝ二寸鉢位のものに植かへる、此植土は壤土三分、腐植土五分、砂二分位を混じたものを用ひ、肥料には油粕の水肥をやる。

すゐせん(水仙)

石蒜科

すゐせんには澤山の種類があり、或者は春早く咲き、或者は遅く咲く、葉の間より花莖を出して其頂に一つ咲くものもあれば、多くの花の簇生するものもある、色は白きもあり、黄色もある、花蓋は二層三片づゝを普通とし、八重咲きのももある、葉は細長き扁平で肉質である。

第 卅 六 圖



種類 至て多數に上るが、其中の普通のものゝ記す。
い、喇叭咲水仙 此中にも數多の變種があるが、大體をいふと、花蓋の副花冠ともいふべきものが喇叭形の筒になつて居る、花の色は淡黄より黄色で、花莖は矮性のものは四寸位、高さものは一尺位になる、三四月頃に咲きいづる、普通作らるゝ良種は

- 1 ムスカリ
- 2 喇叭咲水仙
- 3 バビアナ
- 4 フリジア
- 5 ラナンキユラス

モシヤタス

花蓋副冠皆白、矮性鉢植によし、

- エシペラー
- 深黄
- エンプレス
- 花蓋白、副冠黄
- プリンセプス
- 花蓋黄白、副冠純黄

ろ、星咲水仙 花は花莖の頂に一つ咲き、花莖は長楕圓形でよく展開し、色は淡黄が普通で、直径二三寸になる、副花冠は花蓋の半分位で漏斗状に突出で黄色である、葉は細長く平で綠色に粉を有する、此中の良種は

アルバート、ヴェクトル

オートクツト

プリンセス、マリー

花蓋黄白、副冠深黄、

花蓋淡黄、副冠黄でよく展く、

花蓋乳白、廣くて展き、

副冠大きく橙色

花蓋黄、副冠深黄、大、

花蓋白、中心橙色、重瓣、

花蓋白、副冠長くして黄白、

は、シクラメン咲水仙 花は花莖の頂に數個垂下して咲き、色白く、花蓋は上

サー、ワットキン

オレンヂフェニックス

アマピリス

に反り、シクラメンの花に似てゐる、葉は甚だ細く四月頃咲く、これにも種類が多

に、和種と支那水仙 球根の形には多少の違ひはあるが、葉は肉質の平たき細長く粉綠色のもの五六枚づゝ發生し、其中心より花莖出で、四個以上八個位の花を叢生する、花蓋は白く、淺き皿形の副冠は黄色である、初春の頃より咲き出す、洋種にても此種に屬すべきもの多數ある。

ほ、さずるせん(長壽花) 此種の花は黄色が香芳しく、副花冠は深く盞状で、一花莖に二個以上六個位の花を着く、花莖は圓く細く、葉細長く深綠色をなす其數は一花莖に對して一二枚に過ぎぬ、花期は四月頃で、重瓣のものもある。

へ、口紅水仙 此種の花は花莖の頂に一つ咲き、花蓋は白くてよく展き、幅花冠は淺く、縁は紅色をなす、それ故に口紅といふのである、葉は扁たく粉綠色で、葉數は一花莖に對し、三四枚である、花期は四月頃、主なる種類は、

アルバトロツス

アルミラ

アルバ、ブンナ。オドラタ

以上は種類も十の一を示したのみであつて洋種中に百を以て數ふる程の多くの種類があり、花の形、色、葉の形、花時の早晚、花蓋の單重等實に様々で随分異形の奇なるもの少くない。

一五八

花蓋白く、副冠橙黄、口縁は黄赤、

花蓋純白、副冠黄色、口縁赤、

純白の八重咲、芳香ある、晚咲、

作り方 球根(地下莖)を植付くる季節は通例九十月頃で、其植方は種類により多少はかはれど、四五寸宛を距て、三寸位の深さに植ゑ込む、植穴は七寸位に掘りよく腐つた堆肥などを入れ、其上に土を被ひ、球根に肥料が直接に觸れることのない様に植ゑる、種子は新品種を作り出さうとする専門家はまく事があれど、普通の場合には、此法を施さぬ。

寒氣には強い故、別段防寒の用意もいらぬ様なものである、けれど寒氣の強い處

では藁などをかけ置きて、霜雪を防ぐ。

肥料は堆肥を基肥とする外に、油粕などの水肥を補肥として、花の前に一二回、極薄肥としてやるがよい、但し直接に球根に觸れぬ様注意が肝心である。

花を賞したる後の手当は、實を結ばぬ様に、花莖を切りとりて、球根に勢力を與ふる手段となし、莖葉が枯れ初めたならば、球根を掘りとりて乾して貯藏する、但し植付た儘になし置き、秋になりて手当するも差支へはない、性質の強健なもので至て作り易い。

鉢植にするときには矮性の種類を選び、木框又温室内に入れて育てると、極めて早春に花が咲き初める。

又水仙は其名の示すが如く、水盤栽培が出来、支那水仙が最も之に適する、至つて雅致ある作り方で、文人の嗜好に適し、年々少からず支那の福連省邊より輸入さるゝ、此作り方に二方ある。

一、普通の作り方 まづ球根を薄刃の鋭刀にて、まだ現れぬ花芽を傷めぬ様に注意して四方から皮三四枚位の深さに切り込む。即ち球根の頂端を十字字に切り目の線がつく様に皮を切ると、内部に包まれ隠れてゐる芽が外に出るに都合がよいわけです。至つて花の咲き方が早くなるのである、そこで此切り目をつけた球根を一夜だけ水に漬け、切り口より出る汁をよく拭き去り、水盤の底に細い美しい砂を入れ水を盛り、此中に球根を浸し、先づ涼しき場所に置きて根を発生せしめ、それより日光に當て、育てるとやがて芽が出て花を着ける。

二、蟹作り方 球根から短い屈曲したひねくれた葉が出て、其間より花莖伸びて極く矮性で横廣りで蟹の様な株から花が咲く、是は更に雅致が深い、此育て方は、球を立て其側の方の底に近い所から直角に球根の三分の一位の所まで切込み、別に上からそれに相當する所まで切込み、其部をとり去る、此場合に下手にすると芽を傷めるから、慣れぬ者は球根の縦の半分を、外皮一枚づゝ剝し、芽や蕾が出て來

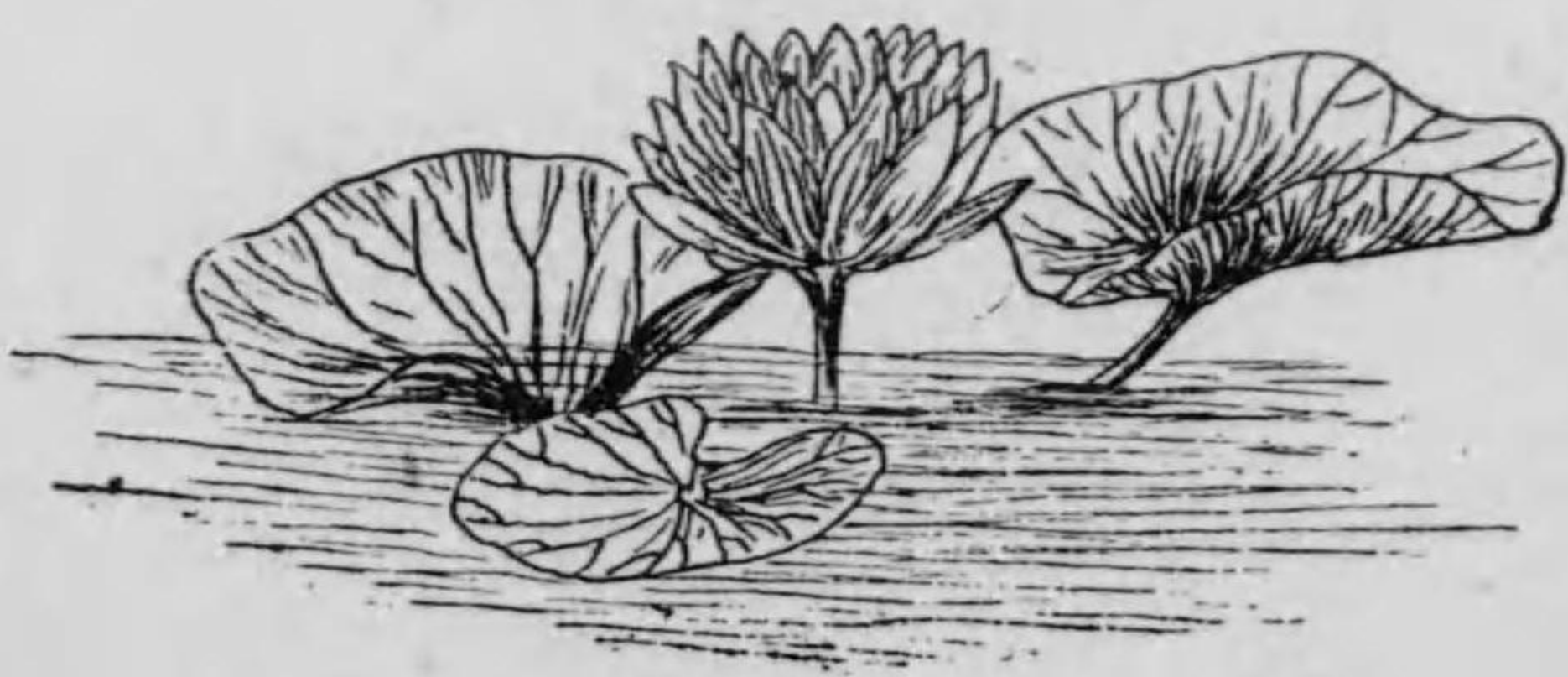
たなら止める、つまる處は葉や花となるべき芽を探り出して球根を半分切りとつてしまふのである、扱残した半分は、一夜水に漬けて粘液を拭きとり、切り口には紙や綿などをあて、切り口を上にして水盤に入れ、砂を布き水を盛り、最初は日光を避け後には日當りよき所にて育てる。

支那水仙を作る者は花が終ると、最早やくに立たぬものとおもつて棄てる者が多いが、之は花後地植にし十分肥料を與へて育て、秋に掘上げ、下肥と土と混じしたものの中に浸して日に乾し、この方法を二回も繰返して貯へ置けば、秋までには生氣を恢復する故、之を育てると其翌年は花が咲く、但し蟹作りは一回限りである。

すゐれん(睡蓮) 一名ひつじぐさ——睡蓮科——

學名では水中の女神とさへ名づけられた、崇高な純潔な此睡蓮は夏の觀賞草花中の最なる水草である、これを水盤に植ゑ、又は池に植ゑると六月頃より花咲き秋

第 七 卅 七 圖 第 卅 七 圖



まで咲きつづく。

花は花莖の上に

一個生じ、

萼片四枚と、

花瓣多數と有し、

花瓣は

花の外部ほど大きく花心に近きほど小さい、そして遂

に多數の雄蕊となる、花心に一個の雌蕊がある、花の

大きさは種類により小さきものは一寸以内より大なるも

のは一尺に餘る、此花は毎日一定の時刻に開閉する性

があつて、晝咲きと夜咲きとあり、晝咲きは朝七八時

頃に開き午後三時頃より六時頃に閉づ、夜咲きは日暮

より咲いて翌朝に閉づる、花が散れば、花莖が曲りて

水中に入り、實を結び、熟すれば水中で裂て散ずる、

花の色は白、紅、藍、黄等様々ある、

葉は卵形より圓で長き葉柄を有して根莖より生じ、

水上に出づるもの水面に浮ぶもの水中に没するものも

ある、色も亦只緑ばかりでなく、葉裏の紫赤色のもの葉面に紫赤色の斑紋のあるものもある。

種類 寒さに耐へるものと、耐へぬものとある、晝咲くものと、夜咲くものとある、其中の良種を挙げると、

寒さに耐へる種類

一、アルバ 晝咲き、白花、直徑五六寸、葉は圓き心臟形、此種の中の變種も少くなす。

ローゼア 濃紅の大花、嫩葉は紫赤色、

カーネア 淡紅の大花で、芳香がある、

ロビンソニー 黄色地に紫紅の量がある、

二、メキシカナ 晝咲き、水上高く咲く、鮮黄色、葉は卵圓形、表面は暗緑に褐色の斑點があつて、裏は暗紅褐色、此中の良品種は、

マ、クロマテラ 鮮黄の大花、花瓣多数で幅廣、强健で、多く作らる、

三、オドラタ 晝咲き、花は白色、葉は圓、表は暗綠色で裏は深赤又は帶赤綠色、花瓣三十枚位、雄蕊多数、此種の良品種は、

ローゼア 淡紅色の花、葉は幼時は暗赤色、

チガンテア 純白の大花、葉は大、裏の葉縁に近く紫、

寒さに耐へぬ種類

一、サンジバレンシス 晝咲き、花は藍色、淡紅もある、花瓣の数は二十枚位、葉は概ね圓く大、裏は紫色を帯ぶ。

二、ルブラ 夜咲き、花は深紫赤色、花瓣は十五、六枚、先圓し、葉は大、赤褐又は青銅色、裏に軟き毛がある、之に屬する品種、

デオニエンシス 花は赤、葉裏は帶綠褐色、

オマラナ 花は淡紅、葉は青銅綠色、縁は縮む、

作り方 箱又は鉢に植土を入れ、之に球根を植まつけて池中に沈め置く、深から

ざる池ならば直に池底に植ゑても差支がない、植土は田の土を乾かし置き之を碎い

て油粕魚粕を混じ積み置きて十分に腐熟したるを用う、植ゑつけの季節は春、霜の

降らぬ様になりたる頃がよい、補肥としては魚肥、油粕などを練り固めて根邊に埋

めてやる、花が終らば寒さに堪へぬ種類は水中より掘とりて温室に入れ水又は水分

を含む砂中に埋めて置き翌春をまつ、鉢又は水盤植ゑのものは、深さ一尺徑二一尺

位の容器と見れば、七分目位植土を入れ三分水を入れて植ゑ付ける、そして毎年

一回植ゑ換へるがよい、尤も池植ゑのもの二三年に一回植換へて良いのである。

蕃殖法は種子よりする場合には、春、水盤は程よく土を入れ水を盛り細砂をちら

して種子を下し、暖き處に入れ置く、發芽の後は小鉢より順次大鉢に植ゑつけ

る、翌年は花がつくであらう、然し蕃殖法は根分の方が簡單で通常である、これ

は四月頃根莖を二三寸づゝにきり泥土中に植こみて苗を仕立てるので至て簡單で

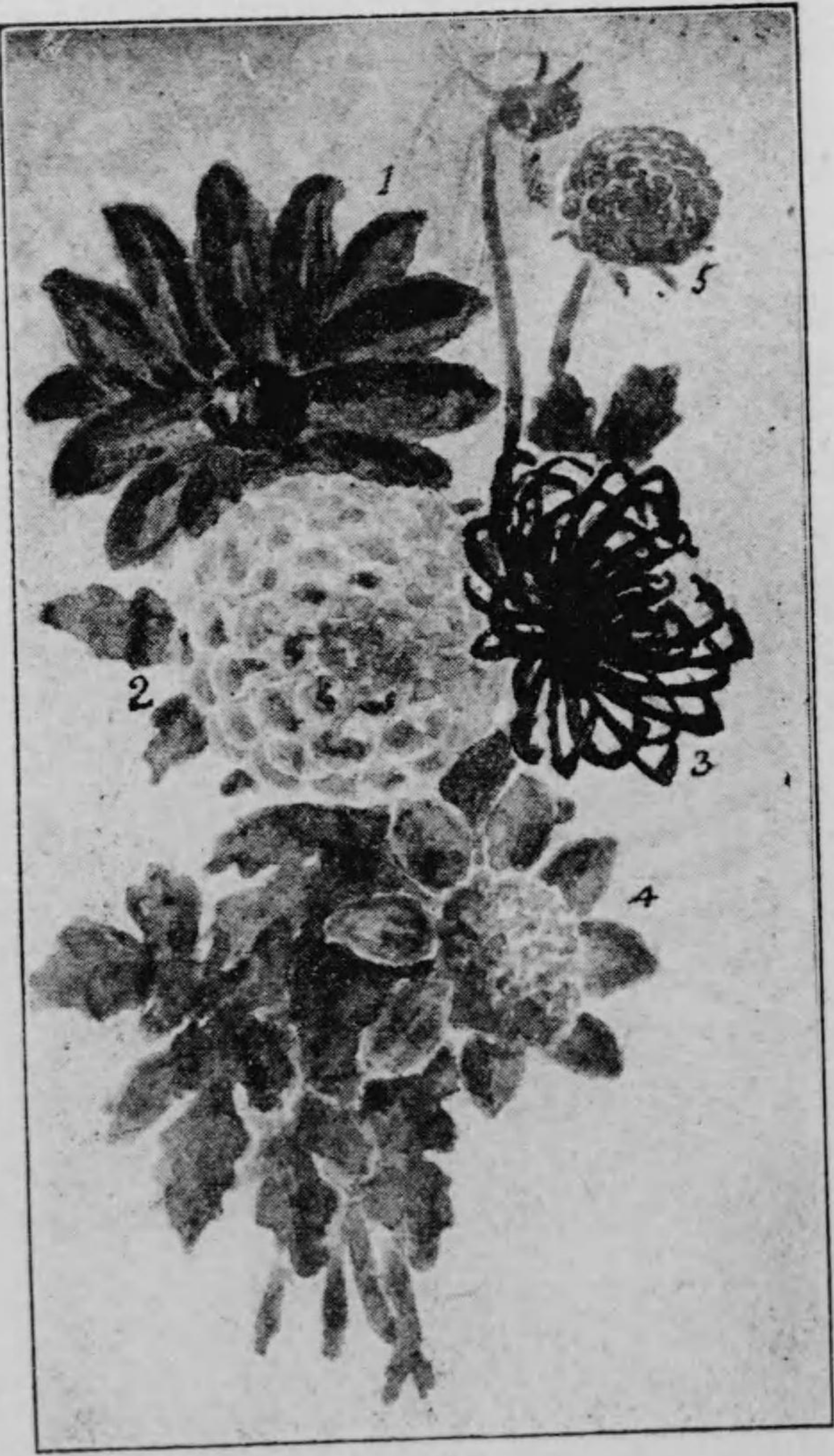
そして確實である。

ダリア

— 菊科 —

天然牡丹とはいへど印度から渡つた花ではない、英國が最も流行で、年々一球數百圓といふ新種が輸出されて居る、我國でも年増しに栽培家が殖え、菊や牽牛花と同様に屢々、花の會を開いて其優秀なるものを互に誇つて居る、花は五六月頃より咲き出し、八月頃一時休み、更に九月頃に入つて一層美大の花を見る、つまり花期は二回になる譯である。花は菊花と同じ構造をなし、周圍に舌状花、中央に筒状花を有すれど、品種によりて大に其趣を異にする。葉は對生し、簡單なる羽状の複葉をなし、小葉の縁は粗き鋸齒を有す、莖は汁多く軟かにして風に堪へ難く、多くの枝を出して花をつく、草丈、一丈位に達するものもある。根は甘藷に似たる塊根で、莖の下部に群生する。

第三十八圖 ダリアの品種



- 1 ピオニー咲
- 2 ジョーダリア
- 3 カクタス咲
- 4 アネモネ咲
- 5 ボン／＼ダリア

種類 輸入された數は約千種を下らぬ程に多い、此花香こそないが、大きさと色

彩さいとに於おては、殆ほとんど草花さうくわ中ちゆう他に比類ひるみのなき立派りっぱさで花期はなどきは長ながし、栽培さいばいは菊きくほど困難こんでもなし、萬人ばんじんに愛あいされて居ゐる、霜しもには甚はなだ脆もろいもの故ゆゑ、晩霜ばんそうを注意ちゆういし、初霜はつしもを用心ようじんせねばならぬ。

先まづ大體だいたいの類別るべつから述のべやう。

一重ひとへ咲さき 普通ふつう一重ひとへの幅廣はばひろき周圍しうゐの舌状せつじやう花冠くわくわんのみ著いちじしく發育はついくせるものである、これにカクタス咲さきといふ、花冠くわくわんの反卷はんくわんしたのもある、此種このたねは劣等種れつとうしゆで栽培さいばいの價値かちが乏とほしい。

毬まり咲さき ポン／＼種しゆといふ、花はなは形かたち至いたつて小ちひさく、また小ちひさい程珍重ほどちんぢゆうされて居ゐるが、花冠くわくわんは圓筒状えんとうじやうに卷込まきこみ、それが球まりの様やうにまろく成なつて居ゐる、此種類このしゆるのものは古ふるく輸入ゆにふされて天竺牡丹てんぢくたんの名なで栽培さいばいされて來きた、近來きんらい更に新あたしき美うつくしい新種しんしゆが多た數すうある。

カクタス咲さき 花冠くわくわんは何いれも細長ほそながくして燃よれ曲まがれる瓣ぺんを有いうす、内曲ないきよくせる美花びくわ多たく、

菊花きくわの形かたちに酷似こくじせるものもある、此中そのうちのよき品種ひんしゆは

- レツドアドミラ
- ユニオンジャック
- ジヨージ、ステフエンソン
- ミセス、ウキルキンソン
- アルバエレクトアイ
- ゴールドデン、プロバ
- ゴールドデン、イーグル
- ミセス、ステフエンス
- エレクトトリック
- エプニングスター
- ミスジット

- 緋紅ひこうの大輪たいりん、
- 白紅縁取しろへにへりと、
- 純黄色じゆんこうしやく、
- 桃色ももいろ、
- 白しろ、
- 黄樺きかば、
- 黄に桃ももと褐かつとのボカシ、
- 淡黄うすき、
- 黄の爪白つめしろ、
- 樺色かばいろに黄きのボカシ、
- クリーム色いろ、

フアルコン

ジョン、ダ、アイク

ヨハネスブルグ

センチュリオン

其他藤波 淡紫 亂雪

菊咲

丸さもあれば尖るもある、色はいふまでもなく様々、此中の良種といはれるのは

アットラクシオン

プリンセス、ジュリアナ

コロネット

エルロー、コロツス

グラランド、デユク、アレキシス

樺、

花心白、瓣先桃色、

濃褐、

深紅、

樺赤等數十種ある。

瓣が幅廣く稍扁たく肉厚く、瓣の先は

海老茶色で瓣先白、

白、

杏色、

深黄、

白、先は薔薇色、

ビオニー咲 花形最大にて牡丹や芍薬に似た立派な花をつく、艶麗といふ點から

いへば此種が第一だらう。但しカクタス咲きの様な藝當に乏しい。良き品種は

ゲーシヤ

バリアント

キング、ベルベット

クロンダイク

レブランドジェー、キツチエン

此外峯の雪 雪白。雪の曙 白中央紅ボカシ。須磨嵐 藤紅色に白の立絞等

シヨ一咲 は毬形の大きな八重花をつけ、ボン／＼の大花の様なものである、單

色か又は瓣の先が少しく濃い、此中の良種は

ミセス、グラッドストーン

ジャック、ローズ

深紅に黄色を帯ぶ、

紅、

黒紅、

黄樺、

桃色、花心黄、

淡紅、

牡丹色、

ダブリユール、ローソン

ジョン、ウオーカー

淡紫、
純白、

フハンシー咲 花形は前種と等しいが、唯此種は色に違ひがある、地色が薄くして濃色の刷毛目や斑があり、或は瓣の先さが薄色である、良品種は

ヘンリー、クラーク

淡紫に黄の點斑、

コメデイアン

橙黄に緋の縞、

ヘーザー、ベル

緋で瓣端少し白し、

コルレット咲 周囲の瓣はシングル種の様に廣く大きく、中央花は發育不良の筒瓣で、其中間にコルレットと名づくる小形の色の異つた瓣を有する、異形の八重咲きである。この中の良種は

アントワーピア

赤にコルレットは黄、

ヘンリーファルマン

白地深紅にコルレットは黄白、

アダム、ペアリエー

洋紅にコルレットは白、

アネモネ咲 は周囲の花は大形の廣瓣で、中央の筒状花が發育して吹詰となり、

アネモネの花の大きな様な花形である、良種は

紅白絞、

ケールウエバル、ゲーター

近年栽培の盛になるにつれて、専門家の間には續々新種を作られ、これに種々の雅名を附する様になつた、面白き傾向である、特に又香氣を附する事に研究せられて居る。

作り方 よき花を見様とするにはどうしても地植ゑでなければならぬ、早咲きを

させたり、地積を持たぬ者は鉢植ゑで辛抱せねばならぬわけだ、然しこれも手入れ次第で随分立派な花を咲かすことも出来るのである。

地植ゑは日當がよく且つ水排きよき地を見立て、とはいふものゝ、普通の花壇で結構である(餘りに湿地でない限りは)、冬の中に深く耕し置き、三尺置き位に植ゑ

穴を設け、底に堆肥、灰、下肥、腐葉等を混じて作れる基肥を入れ、其上に塊根を植ゑつけるのであるが、之に先だちて、分根して苗を作らねばならぬ。

貯藏して置いた塊根を、霜の降りやみし頃、三月末より四月初め頃に出し、塊根を傷めぬ様丁寧に取扱ひつゝ、數多塊根のついで居る其儘、苗床に植ゑて發芽を待つ、芽が出初めたならば成るべく早く、之を掘り起し、芽の出たる塊根を誤らぬ様、傷めぬ様に鋭い刃物にて一つ／＼切り分ける、すべて芽は甘藷などとは違つて塊根のつけ根の根冠といふ處より外には生ぜぬ、初めから此部に注意を拂はねばならぬ、尤もこれさへ承知ならば、苗床に植ゑる前に塊根を一つ／＼切り放しても差支へないが、實驗によると、芽をふかせぬ前に切りたるものは、いくら最初に勢力を割いてしまふわけになるから、苗の發育が少しく弱いやうである、さて此苗床で仕立てた塊根を、前に用意した花壇に植ゑ込む。

花壇の植付けかたは、距離は三尺位にして千鳥に植ゑて、二畦一劃に仕切る

が、後の手入に都合がよい、花咲きたる後の美觀を増すため最初より色合、種類を適當にくばり、特に横に繁る性のものがあり、丈高く伸びる質のものもあり、咲き方も色々違ふ故、其人の嗜好に應じてそれ／＼適宜に植ゑこむ。

苗を花壇に本植ゑするときは、新芽を害はぬ様にしつゝ、三四寸の深さに塊根を植ゑこむ、其の際に施す基肥はあまり多量にやらぬがよいといふのは、多量に過ぎると、草丈は非常に繁茂し、葉の色も濃緑で如何にも立派さうではあるが、莖と葉と丈け立派に過ぎて花が至つて貧弱なことがある、特に夏花に此傾きが來る、事によると種類によりては夏花を見ずに終るなどいふ不成績を來すことがある、さればとて肥料の不足は更に貧弱になるから是れとて少量に過ぎてはいかぬ、過ぎたるは尙及ばざるが如しである、そこで適當の分量を失はぬ様にして育てをき、生長の模様を見計つて、下肥の薄きものに油粕などの補肥をやり、花の見えそむる頃には少くも一週に一回は施して大に草に勢力を附けてやる、六月になると第一回の

花が咲く、花がちらば直にきりとりて種子を結ばせぬ様にする。

七月の末にもなるとだん／＼花が終りをつげる様になる。よし蕾はどん／＼つくにしても花が小さくなつて勢力が弱つてくる様に思はれる、茲に於て斷然たる處分をせねばならぬ、そこで地上一尺位の部、二節か三節位の處より莖を一刀兩斷にして丁う、此時には或種はまだ花盛りであり、又、一方にはだん／＼蕾がついて一日／＼生長して行くのであるから、兎角切り惜むものであるが、若し此際飛々に切り去りたりすると、後の生長が不同になつて、第二回の興味を非常に減ずるから、よきも悪しきも大も小も、同時に同様に切りつめるのである、これは唯小枝をあるすのではなく莖を切りとるのであるから、それを思ひちがつてはいかぬ、さりながら、此莖切りは眞夏のしかも土用中である、時々夕立や、又裂しき暑さの爲めに、切り口から腐つて、新芽が生せず腐つて了うことがある、これが由々敷犬事で折角の珍種も、此一作業で種なしにすることが度々ある、著者は幸にこんな

目に逢つた事は一度もないが、これは寧ろ偶然の幸で、度々あるものと覺悟せねばならぬ、それはとにかく、きりつめた莖よりは勢ひよく新芽が發生する、此内切り去つた節より一つ下の節の二芽だけを生長させて上の芽や、下の芽を摘みとる、此際十分に補肥を與へて、一層勢力をつけ、秋花をまつ、暑き盛りの時節で、無理に一旦生長を押しいたのであるが此後の生長は非常に早く、九月十月頃になると十分の高さとなり、一層美大なる花が咲き初め、茲に始めてダリアの眞價を發揮するのである、尙花期中は相變らず、薄き水肥を與へて力の衰へぬ様にする。ダリアの莖は中空で軟かく風には甚だ脆い故、支柱をやらねばならぬ、二三株や、四五株のものならば、三本ばかり三角に立で之に周りに細き針金を廻らした位の程度で差支へがない、けれど花壇に畦植ゑにした場合は垣作りが便利である、これは一間に一本づゝ杭を立て高さを六七尺位とし之に細き竹又は針金を横に架して五段位に仕切り、莖、枝の伸びるに従つて、糸にて結びつける、糸は藁を用ふる

一七八
が良い。又枝は矢鱈にさしせぬ様に初めから二本位づづ規則正しく排列せしめて、其數をも制限せねば遂に左の枝右の枝と混乱に陥つて大に美觀を損する様になる、蕾の内に制限して多數の小花を見るよりも少數の大花を咲かす様にする、一枝一花にするならば、徑一尺位の大になるものもある。すべてダーリアは兎角丈の高くなり過ぎるのが多いから、初めより心を摘んで、枝をさしせ、早く花を促がす様にするが肝心である。

鉢植ゑは地植ゑと別に大なる差違もないが丈はあまり高くもならず、又温室でもあらば早咲きさせることもできる便利はある、支柱も單に竹位の簡單なもので十分である、唯注意を要することは、水分の不足することなき様にせねばならぬ、花にならば特に氣をつける、されば多きに過ぎては腐る恐れがあるから其積りで與へる。一度霜に逢へば花は直に凋れ、稍霜が強ければ一夜の中に葉も莖も凋れ、無殘なる姿となる、最早此季節は、此花の終りである、最早塊根も十分に成熟した時故、

これを掘り起し、二三日間日に乾し土塊の乾きたる後に、乾燥した暖かき處に貯へる、安全なる法は深く土中に穴を掘り、藁にて包み、又は箱に入れた儘、埋めて置く、又少數ならば箱に入れ、粗藁、藁などにて寒さを防ぎ乾いた物置などに貯へても良い、兎に角冬の中に一回でも凍らしたならば全く腐つて了うものであるといふことを心得て居らねばならぬ。

此草花は分根の外に挿木、接木又實蒔きもする、挿木は強壯な莖の心の充ちて居る枝を鋭き小刀にて二三節にきり、細砂の中に挿し、日蔽をして水氣の乾かぬ様に育てると根が生ずる時節は初夏の中がよい。接木は分根の時に芽の生ぜぬ塊根をとり頂を割りて、接穂の芽を挿しこみ、藁などにて其部を纏ひて土中に埋めて育てる、又實蒔は新種を得やうとする時に行はれる、苗床に種子を蒔いて後に本植ゑにする。然し多くの場合は親より劣等になるものである。

チユーリップ(鬱金香)

百合科

鬱金香といふ雅名が支那から傳つて、詩の材料にまでもなつてゐますから、優美

ブツリーユチ 圖九卅第



な草花である事はいふまでもないが、花壇に鉢に植えて楽しむものは皆西洋から輸入の優等な種類です、艶麗なる色彩、豊満なる花容、實に立派な草花の一つです。

花は六片の花蓋を有し、鐘形、漏斗形をなして上に向ひ、六本の雄蕊が一本の雌蕊を圍み、子房は三角で多くの種子を生ずる、尤もこれは一重咲のもので、八重咲になると花蓋多數に變化してゐること無論である。葉は狭き廣きあれど大體は

細長で、草丈七八寸位が普通であれど、二尺位に伸びるものもある、一本の花莖に一個の花がつくのが通例である。

種類 非常に多數の品種はあるが、要するに早咲種と晩咲種の二つで、更に之を細別すると、早咲種の内に一重と八重とあり、晩咲種の中にバロロット、チユリップ(花蓋の縁に切れ込みあり、花美大、花期は四五月頃)、ダーキン、チユリップ(花は壺状にて全開せず、多くは無地の花、花期五月頃)、レムブランド、チユリップ(花の色は二種以上で縞や縁取、花形大、花期五月頃)、コッテージチユリップ(花莖の先端尖り、外に反轉す、花期五月頃)、フロリスツ、チユリップ(これに三種ある、黄色地に緋、黒、褐の縞、縁取のもの、白地に紫、黒、褐の縞、縁取のもの、白地に赤の縞、縁取のもの)等ある。是等の中で良き種の二三の名をいへば

早咲種 花期三四月頃

一重咲

クリソロラ
メルアリアンス
オフィル、ドール
八重咲

鮮黄、大、最早、
深紅、早、
黄金色、最大美、早、

イムペラトル、ルプロラム
ブラッシュ、アチーブ

深紅、早、
白、大、早、

プリンセス、オブ、ウエールス
晚咲種 花期四月より五月に亘る。

黄、美、大、稍遅、

ダイキン、チュリップ種

ホワイトクキン
マリガレット

乳白、雄蕊黒、球状大、
淡紅、美、

レムブランド、チュリップ種

クリムゾレ、ビュイテ
クアシモド

深紅に白と黒の縞、美、
紫紅に白の縞、美、

パイロット、チュリップ種

パイフエクタ

黄に赤の斑點、

クラモイシー、プリランド

濃赤に黒の斑點、

プレシオサ

赤に黄の縁取、縞、

作り方 此草は左程植土に好き嫌ひはありませんけれど、肥えた軽き水排きのよい處が第一の適土です、そこで植え付けべき花壇の地は深く耕し、よく腐熟した厩肥などを入れ、九、十月頃に土を整へ、距りを四五寸にとり、三寸内外の深さに植えこむ、寒にはよく、耐ふる草なれど關東以北にありては、藁などをかけて防寒するがよい。開花の早き種類は三月頃より咲き出し、遅き者は五月頃にも及び、且つ早咲種は多くは矮性で遅咲きは、丈高く伸びる故、植付けは、其配り方に